

海外協力の 現場から

フィリピン編

青年海外協力隊員の
記録

昭和55年3月

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局

B
6
P
RY

JICA LIBRARY



1045381[9]

國際協力事業団	
入 55.7.18 出 84.5.24	118
登録No. 07393	36
	JVP

序にかえて

昭和55年3月

青年海外協力隊
事務局 長 黒河内 康

ここに、青年海外協力隊員の活動に関する報告書集をとりまとめ、協力隊事業に直接かかわりのある各位はもちろんのこと、日ごろから協力隊事業に深い関心を示され、ご支援を賜わっている多くの方がたの利用に供することができることは、私のまことに欣快とするところである。

協力隊員の活動は、開発途上国において国づくりにいそしむ人びとの“お手伝い”が目的である。時には、お手伝いでなく、自ら手を下してしまいたい誘惑にかられることがあって不思議はないし、事情が許せば、それを排除するまでもない。しかし、多くの場合、「代位」ではなく「介助」であり、もどかしさはもちろんのことだが、いろいろ屈折した感情が累積することもある。

その中で、より一層、途上国の人びとの中に融けこもうとし、協力手法を改善充実しようとする悩み、工夫している過程から生まれた報告書は、貴いものである。報告書に書かれていることはもちろん、書かれなかったことについても。

この報告書集に収録したものは、そうした数多い隊員の報告書の、ほんの一部分にしかすぎない。協力活動の側面も限られているところがある。続編にその補充を期待したいと思うが、読者各位におかれては、この報告書集を手がかりに、協力隊員の活動の間口と奥行きが大きく、かつ多様なことを推察していただきたいと念じている。

協力隊員の技術・技能は、水準が高いたけでも充分でないし、日本式の技術移転で成功するとも限らない。技術・技能をもった協力ボランティアにしてはじめて、途上国の技術・技能の中堅層の育成につながる手法や径路が生まれると信じている。teacher of teachersとして、あるいはtrainer of trainersとして活躍できるよりは、1対1のカウンターパート養成に終わることもあることに、南北問題のむずかしさがある、と感じとっていただければ幸甚である。

この報告書集では、関係職種の協力隊技術専門委員の方がたのアドバイスをいただいて、隊員(OB)の追記と合わせて掲載した。現在活躍中の隊員はもちろん、これから協力隊に参加しようとする青年諸君にとって裨益するところ多いと確信する。ご協力いただいた各位に感謝の意を表したい。

フィリピン編

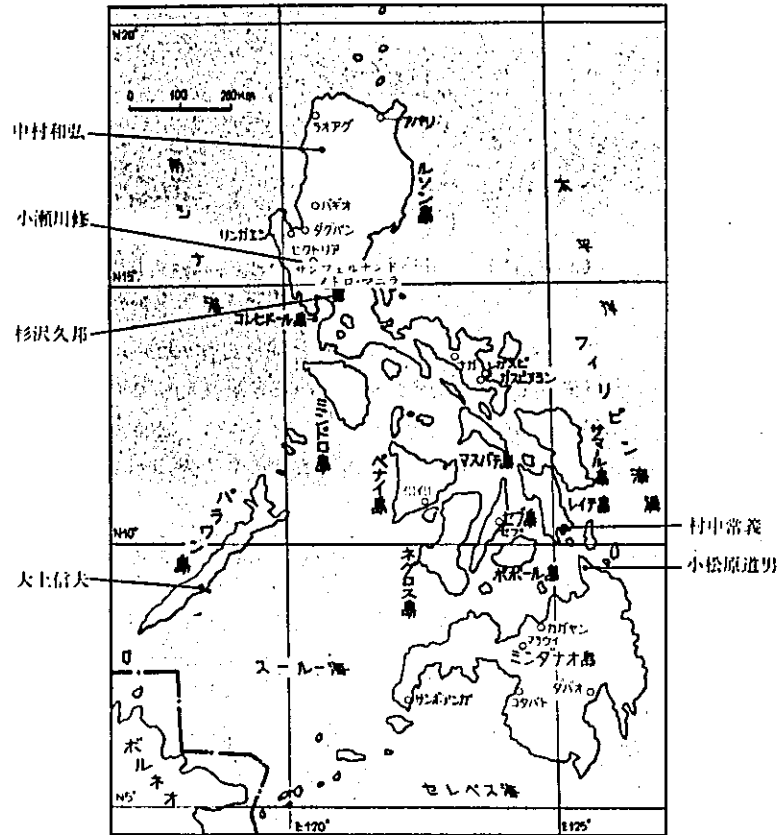
目 次

序にかえて	黒河内 康	… (1)
I Narraにおける稲作栽培	大上信夫	… (5)
日本に帰って考えること	大上信夫	… (20)
大上隊員の報告書を読んで	今井隆典	… (22)
II アブラ工芸学校での活動	中村和弘	… (23)
日本に帰って考えること	中村和弘	… (34)
中村隊員の報告書を読んで	堀江 博	… (36)
III 現地人カウンターパートとともに	小松原道男	… (39)
小松原隊員の報告書を読んで	上川修二	… (40)
IV テクニカル・コンサルタントとして	杉沢久邦	… (51)
日本に帰って考えること	杉沢久邦	… (56)
杉沢隊員の報告書を読んで	堀江 博	… (59)
V 印象深い村々での普及活動	小瀬川 修	… (61)
小瀬川隊員の報告書を読んで	中川龍一	… (71)
VI S.N.T.S.でのエレクトロニクス教育	村中常義	… (73)
日本に帰って考えること	村中常義	… (81)
村中隊員の報告書を読んで	向井政昭	… (84)
あとがき	高橋成雄	… (87)
(付) フィリピンと協力隊		… (2)
フィリピンの略図と概要		… (3)

フィリピンと協力隊 (昭和55年3月1日現在)

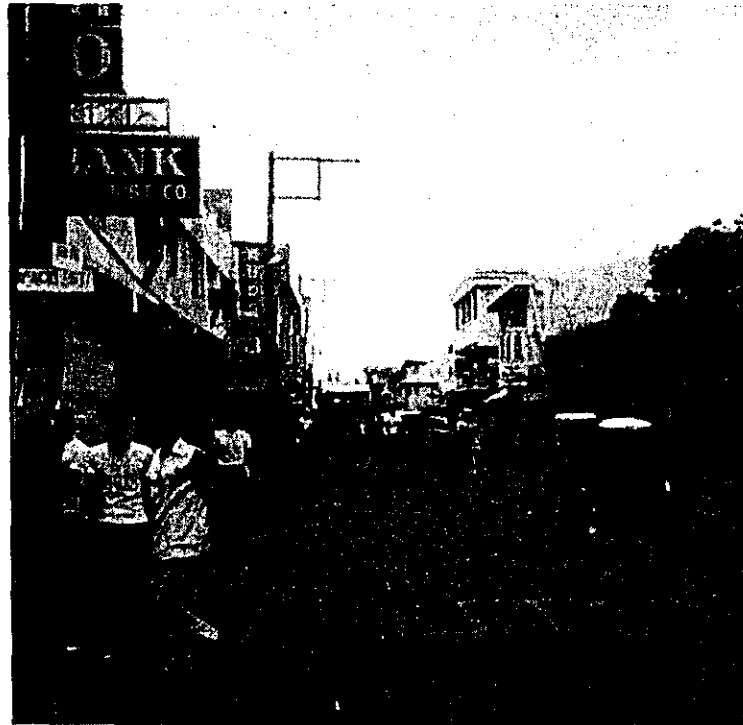
最初の隊員派遣：昭和41年2月								
職種部門	農林水産	製 造	保守操作	土木建築	保健福祉	事務文化	教育訓練	合 計
派遣中	40	7 (1)	21	1	3 (3)	1 (1)	9 (2)	82 (7)
実績 (累計)	287 (5)	16 (2)	40	22	8 (8)	6 (4)	69 (14)	448 (33)

(注) カッコ内は女性隊員。



フィリピン共和国概要

面積：299,404平方キロメートル（日本の0.8倍）
 人口：4,503万人（77年中央国連推計，人口密度：150.4人/km²）
 宗教：キリスト教（90%），イスラム教
 公用語：フィリピン語，英語
 1人当たりの国民所得：407米ドル（日本4,937ドル，76年）
 通貨：ペソ，1ドル＝7.4ペソ（76年），1ペソ＝約28円（78年10月）
 首都：メトロ・マニラ（730万人，76年国勢調査）
 元首：フェルディナンド・E・マルコス大統領
 主な対日輸出品：金属原料，木材，バナナ，砂糖



Narra における 稲作栽培

総合報告書	(50年4月～54年7月)
派遣国	フィリピン 49年2次後期組
職 種	稲 作
氏 名	大 上 信 夫
配 属 先	Pilot Special Settlement Project, Narra, Palawan

大上隊員の略歴

氏 名	大 上 信 夫
生年月日	昭和27年10月7日
出身 県	福岡県
職 種	稲 作
派遣期間	50年4月～54年7月

4年3ヶ月にわたる協力隊員としての任期が満了した現在、この間における私の経験及び観察を通して、特に稲作を中心にそれを振り返るとともに、その将来について述べてみたい。

Narra の稲作栽培における最大の課題は、何といたってもその灌漑施設の不備にあるといっても過言ではない。土壌及びその他の問題はあくまでそれに付随して起こる問題であり、Narra の入植地全体の稲作を発展させるためには、灌漑施設の完備は不可欠のものである。現在世界銀行の資金により、二つのダムを入植地内に建設するという話が進められており、それが実現したあかつきには、Narra の農業生産（特に稲作）は飛躍的に増大すると考えられる。

しかし、それはあくまで JOCV の活動レベルを超越したものであり、隊員レベルあるいは協力隊レベルでの Narra の農業の問題点及びその改善策についてふれてみたい。

I 普及活動

農民への普及活動として、在任中幾つかのパリオを担当したが、定期レポートでもしばしば報告したように、灌漑施設の不備という点を除いて、Narra の稲作停滞の主要原因となっている土壌問題に直面し、初代の隊員としてその解決なくしては、入植地内の稲作指導の効果はあがらないし、また交替隊員の活動にも支障をきたすと考え、その対策を究明することをその活動の主体にした。幸い、IRRI（国際稲研究所）の博士の助言及び農民の全面的な支援のもと、亜鉛欠乏及びリン酸欠乏という二つの土壌障害の発見及びそれへの対応策が一応確立できた（詳細は私の英文レポートを参照してほしい）という点では、少なくとも、協力隊員として幾らかは Narra の稲作の発展に貢献できたという自負はあるが、しかし、それは現在までのところ、ある特定の村落だけのものとなっており、それらをいかに他の村落に普及し、かつ応用するかは今後の稲作隊員の活動にかかっている。また試験栽培で成功したもののすべてが実際の耕作に利用できるものではないため、その間の兼ね合いも常に考えておかねばならないであろう。

例えば、亜鉛欠乏の対策としては、抵抗性品種の苗を田植え前に酸化亜鉛の液につけることにより、ある程度の収量を期待できるが、それに要する余分の労力（特に3～5 ha の水田を一時に田植えする場合）及び技術との兼ね合いなどを考慮するとチェリマスという現地種は無亜鉛処理及び少量の施肥でも30～40 CVS/ha の収量を期待でき、両者を比較した場合、現在の

Narra の農民の状態では、後者の方がより実用的であるとも考えられる。またリン酸欠乏においても株ごと施肥法によりリン酸の必要量はかなり減らせるが、80~100 CVS/haの収量をあげるためには、C-22では50~100 kg/ha、IR42では75~100 kg/haのリン酸施肥が必要である。それに加えて、もちろん窒素及びカリ肥料も購入しなければならないし、また一時に最低2~3 haを田植えするNarraの現状では、肥料に要する資金だけでも農民にとってはかなりの負担となる。農民の中でもある程度資金的に恵まれている者にとっては、さほど問題ではないがNarraの大部分の農民は貧困にあえいでおり、それだけの資金をまかないきれず、いきおいその栽培は粗放的なものとならざるをえず、低収量に甘んじざるをえない。またその低収量のため次回作の資金に困るといふ悪循環の繰り返しである。そのため当初は貧富の差のほとんどなかった農民間にもその収量を通じて、徐々にではあるが階層分化が始まりつつある。しかし、恵まれた農民といっても他地域のそれと比較した場合、まだまだ貧しいため、JOCVの隊員としては、まず第一に、必要な肥料及び農薬などの資材を購入でき、かつ意欲のある農民のレベル・アップを図り、その村落、ひいてはNarra全体における稲作の核としての立場の確立に努めるよう活動すべきであることは論を待たない。一方、取り残されつつある農民のことも常に念頭におき、そのギャップの広がりをしてできるだけ押さえるような方策をも追求していかなければならないだろう。

これからの活動について先輩隊員として望むことは、今までは対象農家をしばり、障害などの原因究明及び稲作栽培体系の確立に全力を投入し、一応の成果はあがったが、反面その弊害として、その活動が極地化され、Narra全般にわたる活動という面で弱いところがあったので、これからは、一つの村落に2~3軒の農家で、一人5村落位を担当して、幅広く活動してほしいと考える。またその対象農家もその村落で比較的恵まれ、篤農家としてその地域の稲作の核となりうる農民と、現在は貧困にあえいでいるが、意欲を持っている農民の二つのタイプを担当するように努めれば、隊員自身の意識及び活動のかたよりを防止できるであろう。

私の赴任当初とは違い、JOCVの活動というものがNarraの農民間で認識されているので、どこへ行こうと拒まれることは考えられないので、自信を持って積極的に農民の中へ入ってほしいと思う。

II 種子圃場

現在Narraには種々の政府農業普及機関が存在するが、そのどれ一つとして、優良種子の供給を行なってははず、JOCVだけがマニラのIRRI(国際稲研究所)UP(フィリピン大学)BPI(Bureau of Plant Industry)から持ってきた種子を農民に委託栽培し、普及を図っているのみである。本来、この活動は政府機関の主導のもと、JOCVが協力するのが建前であるべきなのだが、現在のNarraの状態では、それはあくまで理想論にすぎず、ただ手をこまねいて待っていたのでは、いつまでたっても農民の要求を満たすことはできないであろう。それ故、主客転倒ではあるがJOCVが主体となり、いずれ他の政府機関の協力を求めるという形でしか種子供給システムは確立できないと考える。

種子圃場の確立という案は、私の赴任当初から、我々の懸案の問題であり、手始めにMAR-PNAC内で活動を開始したが、種々の悪条件のため(後述)、場所の変更を余儀なくされ、現在のMARのオフィス前の土地に落ちついた。^(後注)しかし、その場所も排水施設の不備のため、雨期は溜池のようになり、年1回、乾期作しか行なえないという問題を抱えていた。在任中3作ほど乾期に栽培したところ、確かに地理的な位置も絶好であり、土壌も入植地内ではベスト3に入るほどの肥沃さを持ち、種子圃場としては格好の条件を備えていることが確認されたので、ここを種子供給センターとして確立することに決定し排水施設もMAR、MPH(Ministry of Public Highway)及びMAR-PNACの協力のもとで、取り付けた。しかし、この活動を遂行していく上で、以下のことが問題となってくると考える。

- ① 現在種子圃場用に用意されている土地の面積は1~2haほどであり、現在農民がMARから借りて耕作している土地を、将来種子圃場用地として吸収しても、全部で2haほどにしかならず、種子供給を受ける農民の数は限られてくる。また上述の土地を吸収する際の農民への補償も考えねばならない。
- ② 今までは年1回しか耕作しておらず、特に雨期には養分を含んだ上流からの水がこの地で停滞・蓄積していたことが土地の肥沃さの重要な因をなしていたと考えられるが、排水施設を作り、年2回耕作することによる土地の消耗度。

③ 雑草、特にひえの防除。

一応、現在のところ以上のことが考えられるが、①については、Iの普及活動の項で述べた村落の核となりうる篤農家を養成し、それに優先的に収穫種子を供給し、委託栽培させることにより、その村落の種子供給に責任をもたすことにより、ある程度解決できると思う。

しかし、そこで問題となるのは、現在Narraには優良種子を鑑定する政府の役人が存在せず、それらの農民がいくら良い種子を栽培したところで、その価格が消費用のものと一緒であれば、わざわざ手間をかけて種子用の栽培をするものはいないであろう。ついでに種子鑑定をする資格をもつ人を早急にNarraに派遣してもらい、しかるべき筋を通じて要求することが肝要である。優良種子の高価格を保証することにより、農民の意欲を駆り立てることが、まず第一の課題となるであろう。

次に土地を吸収される農民への補償だが、これはもともとNarraの町の所有物であり、本来は町長及びMARのマネジャーの同意さえあればいつでも吸収できるものではあるが、JOCVの性格として、それによって一人でも反感を持つものを作ることは、望ましくないため、その農民との話し合いによって解決すべきものであろう。その農民がその土地の利用の目的を理解して無条件で譲ってくれれば、問題はないが、そうでない場合は、肥料・農薬などの資材を貸し与え、JOCVの方針に沿うように委託栽培してもらい、収穫後ある比率で分配するというところまでは譲歩しなければならないであろう。

②と③については、ひとえにこれから活動する隊員の努力とアイデアにかかっている。②については施肥量の増加及び堆肥の供給などにより、ある程度解決できるであろう。③については、現在の状態では種子の配布がひえの配布ともなりかねないので、当初は幾らお金をかけても、徹底的にその撲滅に努力すべきであろう。

III MAR-PNACとの関係

4年間の活動のうち、最初の2年間はMAR-PNAC(当時はDAR-PNAC)をNarraの農業センターとして確立するという方針のもと、特に稲作については、それに全力を傾けたが、種々の悪条件のため、その計画を断念せざるをえなかった。

その理由として以下のことがあげられる。

1. 位置的条件の悪さ

MAR-PNACは、Narraの中心地より約4km北側に位置し、ここでいくら試験栽培あるいは展示栽培を行なっても、大部分の農民は特別の機会でもなければ、ここを訪問しないため、その普及効果に疑問がもたれた。

2. 土壌条件の悪さ

この土地自体が肥沃でない上に、亜鉛及びリン酸が欠乏している。特に亜鉛欠乏は栽培品種を限定する上、また仮にそこで栽培するにしても余分の労力を要するため、その面積が限られるとともに収量もあまり期待できない。

3. 灌漑条件の悪さ

一応灌漑用水路はあるが、その水量自体が少ない上に、この学校がその最下流に位置しているため、乾期、特に2～5月はほとんど灌水できない。

4. 労働力の質の悪さ

学校で働く上は、外部からの労働力の導入を学校自体が望まないため、いきおい生徒を使わねばならないが、何分にも13～16歳位の遊びざかりであるため、それをまとめてゆくのが大変である。しかも授業時間との兼ね合いもあって、なかなか思うように仕事が進まない。特に田植えや収穫など多数の人間が一時に仕事をする場合、それがき面に現われ、生徒の使用はタダであるという利点こそあるが、仕事自体に外部の農民を雇った場合の3～4倍もかかるという現状では、その時間のロスも馬鹿にならない面もある。

以上の点を考慮し、後半の2年間は、亜鉛欠乏田での試験栽培だけで、他はほとんどプロジェクトを持たなかった。稲作面だけを考慮すると、この学校の畑場でプロジェクトを持つことには何らのメリットもないと思う。その時間を種子畑場の確立及び普及活動にまわす方がより効果的であろう。

しかし、これはあくまで稲作だけを考えた上でのことであり、JOCVとMAR-PNACとの友好関係は絶対に保ち続けなければならないことも自明の理である。特に野菜栽培及び家畜飼育はこの学校をセンターとせざるをえない状態であるし、また上述のことと矛盾はするが、いざという時の人間の動員力という点では、この学校に勝るものはない(その質さえ問わなければ)。学校自体もJOCVをなくてはならないものと考えているし、ここまで

の関係を築いた我々初代の隊員達の苦勞も考慮し、これからもギブ アンド テイクの関係を維持するとともに、友好関係をより増進するように努力してほしい。

Ⅳ. 農民月報（ファーマーズ・プレティン）、農民会議（ファーマーズ・アソシエーション）

農民会議を始めてから約1年半、また農民月報を発行し始めてから約1年たった現在の状況について述べてみよう。

まず農民月報は約1年間、継続的に発行してきたことにより、ある程度農民の中に浸透していることは間違いない。しかし、反面そのマンネリ化も否めない。投稿者の顔ぶれも少数の人に限られ、また特定の農民（特にJOCVと何らかのかかわりをもつ人々）の中では人気はあるが、他の農民の中ではその存在すら知られていないという極端な傾向になりつつある。一応、それを防止するために、村落ごとの掲示板や待合所には掲示してあるが、どこまで読まれているかは、さだかではない。

また、農民会議にしても毎月1回第2日曜日に定期的開催してきたが、同様に出席者の顔ぶれもJOCVにつながりを持つ人（ある意味ではJOCVシンパあるいはファン）に限定されてきている。議題もゆきあたりばつりのもので多くなり、建設的なものはなかなか提出されない現状である。

しかし、もちろんこのことが直ちに、こういう活動が不必要であるということにはつながらない。とともにこのような活動において、JOCVというもののむずかしさが端的にあらわれるのではないかと思う。

つまり、JOCVというものは、根本的にはあくまで援助するものであり、その主導権を握るものではない。しかし、専門分野の場合（例えば稲作）、その効果が収量という形で目に見えるものであり、その是非の判断が農民にとっても比較的容易である。また技術的指導という具体的な目的があるので、JOCVが主導権を握れるし、また握らざるをえない場合が多々ある。そしてその方が現在のNarraではより効果があがるであろう。

しかし、農民月報あるいは農民会議のような活動の場合、その目標とするものが抽象的にならざるをえず、徒らにJOCVがその主導権を握ると、農民自体がJOCVに頼りきってしまい、彼等独自の発想が出ず、JOCVの御用月報、御用会議のような性格を帯びてしまう。また農民間にもそのような雰囲気満ち、「農民による農民のための」という本来の目的が忘れられてし

まう。だからといって、JOCV員を消してしまうことは事実上不可能であるし、これもまた得策ではない。その兼ね合いのむずかしさが現在のマンネリ化を招いているのではないだろうか。つまり農民及びJOCVともに何をやるべきなのかははっきりせず、暗中模索の状態であるといえるのではないだろうか。この現状を打破するには、もうしばらくの間、JOCVがある程度主導権を握り農民を啓蒙していくことが必要なかもしれない。

その日その日の生活に追われ、余裕のない農民はどうしても目先のことにとらわれがちになり、将来にわたる長期的な展望を開くことはなかなか困難である。一方、JOCVの隊員は一応生活の心配はないし、余裕のある生活を送っているので、Narraの将来について客観的に考察しやすい立場であり、現在の農民の共通の問題意識を認識するように努めれば、そのギャップを埋めるべき方策がおのずから導かれ、そのための手段としてこの農民月報・農民会議をどのように生かしていくかということの解答が得られると思う。

現在の時点で私の考えうる農民会議の進め方としては、

1. 農民の圃場見学(フィールド・トリップ)の充実

Narraの入植地は広大な面積を有し、かつ交通手段の未発達のため、農民が他の村落を見学することは、なかなか困難であり、いきおい情報交換が行なわれにくい状況にある。そのため村落ごとに篤農家とよばれ、独特な農法で高収をめざしている人々が存在しながらも、その横のつながりがほとんどない。そのような問題を解消するための一助として、この会議を主体にして、圃場見学を年3回あるいは4回、定期的に行なうことが望まれる。

2. 農民会議を中心としたデモンストレーション・プロジェクトの推進

この会議に参加する人の大部分が篤農家であり、それぞれの村落の稲作の中心者として、ある位置を占めている故に、それぞれが一つずつでもある種のデモンストレーション・ファームをもち、村落の他の農民に目で見せることにより、かなりの影響力を期待でき、その村落全体の稲作技術の発展及び増収への力となりうる。

3. 共同購買組織の確立

現在NarraではAtlas Plantersの2社の支所が農業資材を全面的に取り扱っているが、その供給がスムーズにいつているとはとてもいい難い。特に農薬はその種類が限られるとともに、必要な時期に在庫がないという状態がよくある。しかし県庁所在地であるプエルト・プリンセサ

(ナラより北へ100 km)には、ある程度満足できる種類及び数量がある。また肥料にしてもその種類は同様でも、やはりプエルト・プリンセサの方が安価であるとともに、これも Narra では必要な時期に在庫がなくなり、農民が途方にくれるという事態に、この4年間しばしば出くわした経験から、いつでもプエルト・プリンセサで購入できるシステムを確立することにより、上述の Narra の2支所に脅威を与えることができ、いずれは Narra の供給システムも改善されるのではないかと考える。

4. 農民へのセミナー

再三繰り返して述べてきたように、この会議に参加する人々は、篤農家であり、その知識欲も旺盛である。ついては、特にJOCVの隊員が中心になり、年2回ほどセミナーを開き、実際の現地での経験から得たものを、農民にわかりやすく説明し、ディスカッションすることは農民だけではなく、隊員自身のためにも、よい勉強の場となる。新しい隊員には、かなりの負担になるかもしれないが、徒らに逃げてばかりいては、隊員としての進歩はないと断言できる。

5. その時々の問題の討論

その時に応じ、農民から提出された議題を討論することにより、農民会議としての決議を出す。

一応以上のことが現在考えるが、この会議の本来の目的は「それぞれが孤立しがちであり、また孤立することによって本来持つべき力までも失ない、弱者としてそのしわ寄せを一方的にうけている農民がそれぞれの力を合わせ、また農業生産の増収を通じて、その生活レベルの向上を図ること」にある。新しい隊員達には、この方針に沿って、常に自分なりに考え、自分なりの発想あるいは問題意識を持って、活動してほしいと考える。農民月報にしろ、農民会議にしろ、つぶすことは簡単だが、一旦つぶしてしまえば、それを再び作る時には、最初にした時とは比較にならないほどの苦勞を要するものだから。また将来これを廃止する時が仮にきたとしても、それはあくまで、積極的に前向きに努力した上で、どうにもならないものだったということであるべきであり、決して逃避の上での合理化はしてほしくない。この活動は富高隊員及び私がある程度の経験を積み、また農民間での人望もできた上で始めたものであり、それをいきなり新しい隊員達に引き継ぐのは、かなりの負担になることはわかるが、それを交替隊員の宿命として受けとめ、その維持、発展に努力してほしいと切に希望する。

V カウンター・パートについて

我々初代の隊員は、その活動初期には、カウンター・パートとなるべき現地の普及員と活動をともしよう努力したが、その実態がわかっていくにつれ、いかにその大部分が農民から信頼されていないか、あるいは馬鹿にされているかに気づいた。確かに現在の普及員のレベルあるいはその仕事に対する態度では、仮に私が農民であっても、とても馬鹿らしくて、ついていく気にはなれない。何も知らない上に、また知ろうともせず、そのくせプライドばかり高くしては、農民にとって百害あって一利なしの存在といわれても仕方あるまい。もちろんすべてがそうというわけではないが、総体的に見て、そのレベルの低さには目をおおいたくなるものがある。反面、だからこそ我々が必要とされ、また農民間に深くくい込めたともいえるのだが……。

そのような状況のため、我々初代の隊員は、いつの日からか、彼等と共にプロジェクトを持つという気はなくなり、農民の中にその核となるべき存在を養成すべき行動を始めた。

しかし、JOCVというものは、いずれは Narra を引き揚げるものであり、将来のためには、JOCVの代わりに現在の我々の活動を継承し、かつ発展させる人を、農民の中だけではなく、政府の普及員の中にも養成しなければならぬ。ついでにはこの際、現在の普及員の中から見つけたすという考えは捨て、既存のフィリピン人普及員とは全く違う人達を養成するという見地に立つべきではないだろうか。例えば、大学を卒業したばかりの生徒の中で、将来とも Narra に残る意志のある優秀な人を推薦してもらい、何年か JOCV の隊員と行動を共にさせることによって養成していくことなどを考えてみたらどうであろうか。たまたま Narra の近くには国立バラワン農業大学 (P NAC) もあることであり、それをうまく活用してみるのも一案である。

ただその際大きな問題となるのは彼等の身分措置であろう。JOCVが引き揚げたあと、彼等が途方にくれることのないようにしっかりした位置を約束せねばならない。そのためには何らかの手段を講じ、彼等を政府機関の現地オフィス (BAEX あるいは BPI など) に雇ってもらい、その上で、何年かの約束で JOCV に^{〔後注〕}派遣してもらおうという形が最もよいのではあるまいか。我々は外国人ということで、普通のフィリピン人ではとても個人的に物事を頼めないような政府機関の偉い人にも、ある程度簡単に会えるのであり、そういう時にこそ、その特権を大いに活用すべきであろう。とにかく私の経験から

すれば家庭をもつ普及員と女性の普及員には、とても今以上のものは期待できないのだから。

それと関連して、上述のようなことが実現できても、そのカウンター・パートを簡単に日本に派遣することは慎むべきであろう。ただ単に日比視善のためと割り切るのならそれもよいが、本当の技術を養わない、現地のために尽くしてほしいと考えるのなら、例えば稲作でなら、IRRIあるいはUPなどで勉強する道を開いてやることの方がより効果的であろう。日本で育ち、日本の大学で4年間勉強した者でさえ、その違いにとまどう熱帯農業である。言葉も本当に理解できない異国の機械化された農業をはたして1年間ほど学んだとて、帰国後、現地でそれを生かせるものであろうか。徒らにプライドばかり高い親日家を養成することになるのではないだろうか。これは隊員一人一人の業種及び考え方の違いもあり一概にはいえませんが、少なくとも Narra の稲作の現状を基にして考えるならば、その改善のためには、フィリピン国内で研修する方が、より農民に還元できるものを得られることは間違いない。プライドばかり高い普及員には農民はもううんざりしているのだから……。

VI Narra での隊員に望まれるべき生活態度 及びチーム派遣について

Narra という町は協力隊員の活動の場としては最高の地であるといつても過言ではあるまい。というのは町自体が新しく、既成のものがあまりないので、我々のような若い者でも、人々に受け入れられさえすれば、彼等の協力のもと、新しいものをどんどん開拓していける土地があり、また農民も意欲に燃えて入植してきただけあって、その意義さえ理解できれば全面的な支援を惜しまない。そこで隊員に要求されるもの、また我々が特に注意してきたことは「隊員は専門業種だけやっていたらよいものではない」ということである。つまり稲作隊員といえども稲を栽培していればよいというものではないということである。もちろん、人々に理解され、協力を受けるのは専門分野での業績をあげ、農民及び政府の役人を納得させることができからであるが、それができてもそこで満足するのではなく、現在自分のやっていることが Narra 全体の稲作発展ひいては農業発展とどのように関連するのか、そのためには将来必要となるものは何であるかを常に農民より一歩も二歩も先んじて考え、必要なものがあればどんどん開拓していただく積極性が要求される。目先のことだけにとらわれ、自分自身を小さくまとめてしまうこ

とだけはすべきではない。我々までが農民と同じレベルで物事を考えていたのでは、Narra に隊員が派遣された意味がないし、農民にとっても不幸である。

そのためには、農民とだけつきあうのではなく、積極的に種々の階層の人の中に入ってゆき、幅広い交友関係を持たねばならない。任地にいる限りは、隊員であるとともに、その地域社会の一員であることも常に自覚し、それが直接的には自分の仕事に関係のないことでも、要請があれば心よく引きうけるだけの余裕が必要である。その中で語学も上達するし、また知名度も高まり、ひいては自分の仕事に戻ってくるのである。

それと関連して、私は協力隊員は特に田舎では一種の「スター」であると考える。Narra という人口3万人の町にたった5人の日本人、それも若いくせに金を持っており、自分の仕事のためには相当の資金を使い、仕事はまじめにやる。これでは注目を浴びることはまぬがれないとともに、噂の種にもなりやすい。日本人の噂をしている限りは少なくともフィリピン人の誰一人として傷つかない。そういう所では我々も自分のふるまいには十分気をつけねばならない。例えば、フィリピン人と口論することが避けられないケースにぶつかった場合、そのまわりに自分を理解してくれる人がいることを確認するとともに、その理由も、少なくとも自分が7割方正しいという場合ですら、噂になった時は「どっちもどっちである」ということになる。もちろん絶対に腕力を行使してはならない。これは一例であるが、とにかく少なくともスキャンダルになるようなことは絶対に避けるべきである。日本人にとっては冗談でも、フィリピン人にとってはそうでないこともあるし、またその逆の場合もある。早くその違いを認識することである。協力隊員がそこでよい仕事ができるかどうかは、ひとえに“人間としての信用”にかかっている。それを作るのには長期間を要するが、こわすのは1日で十分なのだから。

次にチーム派遣の件だが、この4年間Narra JOCVチームの一員として活動し、また自分自身チームの中での一番下っ端の立場から、その中心としての立場までを経験した現在でも、こういう派遣システムがよいのかどうかについての結論を下すのはなかなか困難である。ただチーム派遣というものはその中でバランスがとれている場合は、5人の隊員で10～15人分の力を発揮するものではあるが、ひとたびそのバランスが崩れると、互いに足のひっぱりあいになり、その力は激減する危険性もはらんでいる。

ここではその派遣制度の良し悪しよりも、これからもこういう派遣システ

ムが増加していくという前提のもとで、私の経験を通して隊員がそれぞれ互いに注意すべき点について述べてみたい。

1. 人のあげ足取りをしないこと

現地の人の中に、少数の日本人がいると、日本社会で生活する以上にその人間関係が濃縮され、どうしても他の隊員の短所が目につきやすくなるとともに、往々にしてがまんできなくなるものである。そのあげくが「重箱のすみをつつく」ことになり、あげ足取りに終始してしまう。

それぞれの隊員が物事の本質を常に考える態度を養なうとともに、本質にかかわらないことには目をつぶれるだけの余裕を持つことが大事であろう。極端に言えば、あまりに神経質な人は、その可能性よりも危険性の面を考慮して、チームの中に派遣するのは避けた方が無難であろう。

2. 少なくとも他の隊員の足をひっぱるような行動をしないこと

自分一人が派遣された任地、あるいは何人かで派遣された任地でも、その職種が違えば何でもない行動でも、全隊員が類似した職種であれば、それが他の隊員の迷惑になるかもしれないということを常に念頭に置くべきである。例えば、全隊員の職種が農業関係であればその主要な交際範囲は農民ということで一致するものであり、一人が変な言動をすれば、それが全農民間に伝わり、JOCVチームとしてみられるのである。それが農民間の「最近のJOCVは……」うんぬんの言葉として現われる。何年か活動し、その交際範囲の中である程度の基盤を持った隊員には、それほど影響はないが、新隊員にとっては負担となるものであり、古くなればなるほど、現地の人との交際には気をつけねばならない。

3. 現地の人にチームの仲間についての批判を聞かせないこと

これは絶対に守るべきことであると考え。幾ら仲間の中での人間関係が悪くなっても、それが内々におさまっている場合は、現地の人もそれほど勘ぐらないものであるが、一旦JOCVの枠を飛び出せば、格好の話題の種になってしまう。特にフィリピン人は人の悪口をいうことにかけては天才的なものをもっているのだから、気をつけねばならない。外部には形式的にしろ、あくまでJOCVは一枚岩であるという態度をとらねばならない。しかし不幸にして、それが外部にもれた場合、彼等は面白半分になぞねてくるが、幾ら頭に来て、それに徒らに反応し、自己弁護をすると泥沼にはまってしまうので、それがどうしてもよい内容のものであれば、「No comment」あるいは「I don't know」ですますべきであろう。

4. シニア隊員をチームのリーダーとして派遣することは避けた方がよい

チームの中にシニア隊員がリーダーとして派遣された場合、現地の人々がJOCVの隊員の序列を作ってしまう。隊員が新しい場合、リーダーとしてシニア隊員がいることは心強いものではあるが、その隊員が経験を積み、自分なりに自信がついた場合でも、現地の人から一人前に扱ってもらえず常に「リーダーはどういつている」とたずねられることにより欲求不満になってくる。またそのシニア隊員が優秀であればあるほど欲求不満と劣等感の入り混じった複雑な気持ちになるものである。これは隊員の心の狭さといえはいえるかもしれないが、そういつてしまつては、あまりにその隊員に酷である。1でも述べたように、外国のしかも田舎では、その人間関係が濃縮してしまうために、日本社会ではどうしてもよいこと、あるいは当り前のことでも、時には耐えられなくなるものである。またそういう雰囲気ではそのシニア隊員にもいらぬ負担をかけ、その人の持ち味までを殺してしまう可能性がある。シニア隊員は経験を積んだ隊員として尊敬はするが、しかし、チームのリーダーとして派遣することは、なるべく避けた方がよいと思う。

5. チームの中では2番目に古い隊員の役割が最も重要である

というのは、最も古い隊員と、新しい隊員の間にはどうしてもない経験の差からくる思考のギャップがあり、話をしても一方的に古い隊員の独演会になってしまいがちである。その年数にかなりの差がある場合はなおさらである。故に2番目に古い隊員は、そのどちらにも偏らず、物事を客観的に判断するとともに、その間の調整を図らねばならない。これにはかなりの人間性の豊かさを要求され、我々のようにすべてが若い者で構成されている組織にとってはなかなか困難ではあるが、チームというものを考える場合、絶対に欠かせられないものである。

ついでに、隊員の経験年数の偏りを防ぐように、協力隊事務局の方で考える必要があるであろう。つまり一定期間ごとに隊員を入れかえ、その経験年数の差が、半年ぐらいの差になるようにである。いろいろ困難なことがあるのは察するが、是非検討してもらいたい。そうすれば経験の差からくる思考のギャップというものはある程度防げると考える。

6. 自分の仕事だけでなく、他の仲間の仕事の方針を把握するように努力するとともに、暇をみつけては討論すること

チームとして派遣されている限りは、仲間が現在どのような方針のもと

で、どのような活動をしているのかを把握しておくことは不可欠であろう。自分の仕事の合間に、仲間の現場について行くことで、それと自分の仕事とのかかわりを知ることができ、チームとしての大方針も立てやすくなるであろう。また、技術的なものは理解できなくとも、その方針については討論できるはずであり、それを活発に繰り返すことによってチームとしての軌道修正も比較的簡単に行なえるようになる。

7. 後輩隊員は軽率に先輩隊員の批判をしないこと

往々にして、新しい隊員はその意気込みは買えるが、物事の判断に余裕がなく、先輩隊員の行動を自分のものさしで考え、軽率に批判しがちである。またそれが批判といえるものではなく非難になりがちである。その任地に2～3年住み、現地の人からある程度の評価を受け、自分の仕事にそれなりのプライドを持っている隊員を相手どった、何らの実績もなく、現地語はもちろん英語すらも満足にしゃべれない隊員の軽率な批判ほど、先輩隊員を侮辱するものはない。これでは先輩隊員に、後輩隊員の面倒をみよう、という気を失わせるのも無理はない。

8. 先輩隊員は現在の自分のものさしで新しい隊員を判断しないこと

これは7のことと裏表だが、往々にして先輩隊員は現在の自分と新しい隊員を比較しがちなものである。それが「俺ができるし、やってきたのに、何故お前にはできないのだ」という言葉になる。これほど交替隊員の負担になる言葉はないかもしれない。先輩隊員は、自分もここに派遣された時は、今の新しい隊員並みであったことを思い起こし、早急に新隊員を判断してしまう愚は避けるべきであろう。

以上思いつくままに書いてみた。他にもいろいろあると思うが、少なくとも上述のことには気をつけてほしい。帰る間際になつていろいろ考えても遅いから。新しい隊員には、チーム派遣の何たるかを早く認識し、思いきって活動してほしいと思う。

この4年3ヶ月いろいろなことがあったが、とにかく楽しかった。これもやはり現地のフィリピン人の好意に支えられたものであり、これから日本に帰っても文通などを通じて、その友好関係を保ちたいと考えている。

(注) MAR : Ministry of Agrarian Reform, 元はDepartment of ~

PNAC : Palawan National Agricultural College

BAEX : Bureau of Agricultural Extension

日本に帰って考えること

大 上 信 夫

日本に帰ってから半年、そして就職してから1ヶ月を経た現在、協力隊から送られてきた私の総合報告書を読み返してみても、まだそれほどの違和感を感じられない。その内容自体もそれほど的是はずれなことは書いていないと思う。

ただ、それを読んでつくづく感じたのは、それを書いた当時の自分と現在の自分との立場の相違である。もちろん、それは日本の会社に就職したことからくるものである。現在の自分には、基礎から勉強し直さなければならないことばかりだし、そのうえ、新しい人間関係を作り出すことなど、毎日が緊張の連続で、自分自身に余裕のない日々を送っている。隊員時代のような甘えは許されないとともに、甘えたときが最後だと思っている。しかし、これは誰もが新しい環境に適応するのに経なければならない過程であり、耐えてがんばるしかないものであることも、もちろん承知している。

さて協力隊を離れて半年たつが、いろいろな問題はあるにせよ、協力隊員としてのフィリピンでの活動及び経験は、自分にとってすばらしいものであったとともに、貴重な財産であるということは決して疑わない。現在任地で活動している隊員、そしてこれから協力隊に参加しようとしている人々に強調したいのは、とにかく毎日の生活を楽しむように努力してほしいということである。楽しむといってもただ遊べということではなく、仕事の中、あるいは現地の人々との人間関係の中に見出し、生活をエンジョイしてほしいということである。特に協力隊員の場合、仕事は与えられるものではなく、作り出すものだということを考えてほしい。楽しくすごしても、文句をいってすごしても2年間しかないのだということを肝に命じてもらいたい。確かに、それぞれの国で、日本では考えられないような問題が生じてくるだろう。しかし、日本にだっていいことばかりがあるわけではない。物質的には貧しい国の方が、精神的あるいは生活のすごし方という面で、より豊かであるということを痛感させられる場面に、日本へ帰ってからはしばしば出くわす。隊員は普通の日本人では経験できないようなことをやっているのだから、自己満足でもよいから「何かをやった」という充実感を持って日本へ帰り、一生そんな経験のできない大部分の日本人に、自分の派遣された国への愛着を持って、その国のことを説明

し、理解を深めさせる義務があると考え、またそれができると生活を送ってほしい。

最後に私自身のことをいえば、大阪にはアジアの人々との連帯を深めようと努力している会のあることを知り、先日それに入会した。ささやかではあるが、協力隊とは違った面で、その会を通して活動したいと考えている。

大上隊員の報告書を読んで

今 井 隆 典

大上隊員は4年3ヶ月という長い任期を終えるに当って、その間に体験したことをきめ細かく述べると共に、問題点を的確に指摘している。一般に、努力したからといって、必ずしも成果があがり、評価を受けるとは限らない。彼は後継隊員を成功へ導く貴重な指針を示しているといえよう。

稲作の最大の課題である灌漑施設の改善は、自分の限界を超える事項であると判断し、その活動分野を普及事業、種子の確保、MAR-PNACとの関係、農民月報の改善などに変更したのは賢明であったと考える。これらの四つの課題は、後任隊員によって引き継がれてゆくであろうが、後任隊員がこれらを処理してゆく場合の参考書として、松本順著『生活に役立つ心理学』（ダイヤモンド社）をお薦めする。（青年海外協力隊技術専門委員＝稲作）

アブラ工芸学校での活動

総合報告書 (52年4月~54年8月)

54年8月15日記

派遣国 フィリピン 51年2次後期組
職種 電気工事
氏名 中村和弘
配属先 Abra School of Arts and Trades,
Bangued, Abra

中村隊員の略歴

氏名 中村和弘
生年月日 昭和21年10月1日
出身県 愛知県
職種 電気機器
派遣期間 52年4月~54年8月

フィリピンⅡ……アブラ工芸学校での活動

私が当地アブラに派遣されたのは今から約2年4ヶ月前の1977年4月16日であった。私は一応前任者であった望月泰男隊員の交代要員として、Abra School of Arts and Trades (A.S.A.T.) に赴任した。活動期間は1977年4月16日から1979年8月30日迄。

望月前任隊員は1973年当地アブラ州の総合電化計画の一環としてアブラ州庁に属していた所のABRECO (Abra Electric Cooperation) に Governor の要請によりテクニカルコンサルタントとして赴任し、主に変電、送電、配電等の諸設備の建設技術コンサルタント及び電気施設の維持、管理の指導を主たる業務とし、その後地元の職業訓練校であるA.S.A.T. (アサト) の要請により1975年4月同校に移籍して、電気科、電子科のテクニカルアドバイザーとして、各科のグレードアップを図る目的の為に1977年の4月私が赴任する迄同校で活動し、私がお後を引き継いだわけである。

だが一応仕事は引き継いだものの、さて何をやったら良いのか。それに丁度私が赴任した当時は学校も6月の中旬迄夏休みであった為、それ迄全く授業に関した事に触れる事も出来なかった。それに自分のカウンターパートとも接触する機会も余り無かった。その後6月中旬に一応学校は開始されたものの、自分のプロジェクトに対する考えも確立されていなかった事もあり、全く計画がたたず、自分は何をしたら良いのか、それに自分の語学力の低さも手伝って学校側とのコミュニケーション不足という問題も起り、やっとプランを作成したものの学校に予算申請してもコミュニケーションギャップの為に失敗していたと言うのが実状だった。その内に現地の生活に慣れないせいかデング熱、その他原因不明な病気に数回悩まされ学校も度々休まなくてはならないといった羽目になり、やっと現地の生活に慣れたと思ったら今度は自分のプライベートの問題の為に日本の両親から緊急帰国せよとの連絡を受け、赴任してから半年も経たない内に緊急一時帰国をしなくてはならないという事態になり、活動も本当に思うように運ばず、気だけはあせていたと言う感じだった。

自分の学校に於けるプロジェクトに対する見通し、また語学に少し自信がついたのは緊急一時帰国から帰ってきてから約2ヶ月後の1977年12月初旬であった。その時にはすでに私がA.S.A.T. に赴任してから8ヶ月も経過しており、夏休み、セミスターバケーション等を除いたら実質自分が当校にて活動できるのは1年足らずと言うような状況だった。

そのようなわけで学校に於ける本格的活動のスタートは大変に遅れたが、そ

の後の活動は一応スムーズに運び、自己満足かも知れないが、自分としては一応悔いのない協力活動をし、終了する事が出来たと思っている次第である。以下私のこの2年4ヶ月の間Abra School of Arts and Tradesに於ける活動内容、問題点、また滞在中の経験から得た今後の指針、展望等を述べたいと思う。

Province Abra の概略

1. 位置

アブラ州はルソン島北部に位置し海岸線からキャピタルタウンである所のバンゲット迄約30Km山の中に引っ込んでいて、西はイロコススール州、東はカリంగాアパヤオ州にはさまれていて、周りが山で取り囲まれた感じである。

2. 気候

雨期、乾期に分かれているが、雨期は熱帯地方特有な感じはなく、雨期といっても比較的雨が少ない。またバンゲットは盆地である為乾期に於ける暑さは相当なものである。一応雨期は5月下旬から10月上旬、乾期は10月から5月といった所である。また地理的に北部に位置しているせいか一般的に気候は日本の秋頃によく似ている。また周りが山に取り囲まれているという地理的条件から台風による影響は少ない。

3. 交通

相当山の奥に位置しているが、その割には交通機関は発達していて、3社のバス会社を有し、その内の2社は朝5時から夕方7時迄それぞれ毎時間マニラ行の直行便を走らせている。またアブラから40分イロコススール方面に下るとエアコンバスに乗り継ぐ事も可能だし、普通バスなら約15～20分毎に同地を通過している。マニラ迄の所要時間は約8時間、道路はアブラからマニラ迄完全舗装されている。また最近飛行場の建設の具体案が出ていて、近い将来マニラ迄飛行機を利用して行く事が出来るであろう。

4. 住民、生活

アブラの人口は約13万人でその内の約3割がキャピタルタウンである所のバンゲットに集まっている。住民はイロカノ族で、イロカノ語を日常の会話に使用し、地理的環境により、彼らは昔から他のプロビンスと余り深い接触交流が少なく、結婚等も州内同士で行なわれる方が多いといった

典型的なイロカノ族の習慣、思考を形成している。また住民は初対面者に対して必要以上に警戒する方で、直ぐには馴染めないといった感じである。家族は平均6～9人で山間部に行く程多いようだ。それ故に食生活にも大変に厳しいものがあり、毎日の食事には、イモの葉、カボチャの葉、バナナの花、カエル、アリ、犬等を欠かす事はできない。

5. 産 業

昔からこの地理的条件が関係してか特に産業というべき物は全く無かったが、数年前に総合電化計画が実施された折、州庁が積極的に産業誘致に乗り出し始めた事、住民の産業に対する意識向上等で最近地の利を生かした製紙工場の進出でこのアブラにも新風が吹き込んできた様子である。またバンゲットから約40 Km山奥に入った所では昔から金の採掘が行なわれている。その上最近日本のコンサルタントによる地質調査が数ヶ所で行なわれ鉱物資源が有望である。

6. 農 業

主に米作で、それも2期作は気候的に無理であったが、最近はその間にタバコの栽培が大変に盛んになってきた。野菜類は余りできず、マーケットに売っている野菜は殆んど他のプロビンスからのもので値段も高く、食生活には余り野菜は使われない。最近かんがい施設の設置計画の問題も出ていて、一応日本政府の援助による調査が終了しており、いつかはこのアブラに於ける農業も変貌を見るであろう。

7. 将来性

以上のような地理的条件の為にかなり経済発展は遅れているのが実状で、また住民に言わせると、この20年間、このアブラに於いては何一つ変わっていないといていたが、本当の事も知れない。それはアブラのみならずこの国全体に言える事でこの国の国民性も影響していると思う。いずれにしても当地アブラに於いては数年前に電化されてから、生活環境、経済動向に関して少しずつ変わっている事は確かだ。だが今のように他のプロビンスと余り交流がなく、アイソレートされている以上は余り大きな経済的発展は望めない。道路建設により隣接する各州との接触交流が重要なポイントに思える。

A.S.A.T. に於ける活動経過

I 赴任当初感じた点

1. 教材、設備に関して

電気科に関しては計測器等は前任者によりかなり準備されていたが、工具類が不足気味で、その上計測器、工具類は全て小さな箱に納められており、それも教室から離れた場所に保管してあったのでインストラクターもそれらの教材を授業に余り使用していなかったように思う。また電子科については工具、計測器、その他の機材は無に等しく、ペンチ、ドライバー、ハンダゴテ、各一丁を所有していたにすぎず、職業訓練校に於ける電子科とは思われなかった。

2. 教室の環境について

同一ビルディングに4クラスが同居していて、その上クラスの間にはお互いに何の仕切りも無く、同一教室で授業を行なっているような感じで、関係ない生徒が隣のクラスに行ったり来たりしている。また他のクラスで実験をやっていると、授業中にも拘らずそちらに目を向けているといった調子であった。その上教室の机はかなり傷んでいて、とても机と言えるような物でなかった。

3. 生徒の質に関して

教室でタバコを吸っている者、授業中にラジオを聞きながら授業を受けている者等がいて生徒の授業態度の改善徹底が望まれた。また授業に毎日参加しない者がいて、時には半数近く休んでいた。これらの点からインストラクターの生徒に対するオーソリティーの弱さが目立った。

4. 授業内容について

生徒は自分の教科書を持たず、先生が参考書からピックアップして黒板に書き、それを生徒が自分のノートに写すという方法で、時には生徒はそれを写すのに忙しくて先生の説明無しに授業が終了してしまう事が多かった。その上、使用可能な教材が多くあるのに、余り授業の上で使っていなかったのが実状であった。だから生徒は理論的には知っているようでも、機械的に覚えているに過ぎず、実際には余り役に立たず、職業訓練校の教育指針から外れているように思えた。

以上の事柄が赴任当初私が強く感じた事であり、またこれらの事柄を改善してゆく事から私のA.S.A.T.に於ける活動を開始した。

II 電気科に関して

前に述べたように電気科は、JOCVによって準備された多くの機材を保有していたが、それらが余り授業の上で有効的に利用されなかった原因として、下記の事が考えられた。

- (1) 常時箱に納められていて、いつでも必要な時に使用できる状態になっていなかった。
- (2) 教室からかなり離れた所に保管されていた(保安上の問題もあったと思うが)。
- (3) 使用方法を熟知していなかった(使用説明書は前任隊員によってかなり詳しい物が準備されていた)。

上記のようなわけで機材は一応教室のインストラクターに対して身近な場所に保管する事が望ましいと考え、学校側と相談して設備、工具ルームを作ってもらい事に決定し、2,000ペソで約1ヶ月後に完成、そのついでに不足していた工具類も補充する事によって設備の増強を図った。また工具の管理、特に紛失防止も大きな問題であった為に、工具を全部ベニヤ板を打って引っ掛けるようにし、工具の位置に同じ型の絵をペンキで描き、工具を取り外したら一目でわかるようにした。

その結果以前とは格段の頻度で教材を授業の上で使用するようになり、また生徒自身もそれらの機材を使った実験に興味を覚え、一応の効果はあったようだ。その上工具の紛失もかなり少なくなったと同時に、インストラクター、生徒に対し、機材工具の整理・整頓という基本事項を強く認識させる事が出来た。それに計器類は特に精密な機材であり、熱に対しても敏感で狭い箱に入れて保管する事は維持・管理上からも好ましくない。

III 電子科に関して

電子科も兼ねて担当して欲しいとの前任隊員、学校側からの要望であった為、一応、科の現状を見たが全くひどく、工具は全く無いに等しく、もちろん計測器などは1台も有していなかった。もっとも当校の電子科の設立はまだ日が浅かったのだが、この状態では何の実習をする事も不可能で、ただ先生がハンダゴテ、ドライバー、プライヤーの各1ヶずつ所有しているだけで生徒達は先生がラジオを修理しているのを周りを取り囲んで見ているだけといった授業であった。それに近い将来カレッジを併設する計画とあっては全く話にならず、その上机が無いようでは全く授業という雰囲気ではなかった。

この件に対しては直ぐにでも学校側と交渉して工具の整備、設備ルーム、

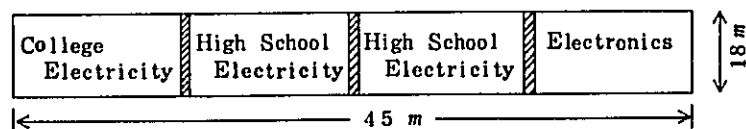
机の製作を開始したかったのだが、電気科のプロジェクトが途中であったので直ぐというわけにはいかず、去年の10月、約1,400ペソで工具を、2,000ペソで設備ルーム、1,500ペソで机を学校から準備してもらい、何とか必要最少限の設備にはなった。それと並行して電子科のカリキュラム作成も実施する予定であったが電気との掛け持ちと、冷凍コースの準備の為にこの電子科に対しては上記の事のみで十分に力を注ぐ事は出来なかった。

だがこの電子科で教えている私のカウンターパートはインストラクターの資格が無くティーチャーである為学校のアドミニストレーターに対する力、発言力は全く弱く、我々のような隊員がサポートしてやらないと、多くの面で科のグレードアップは難しいように思える。それに今後カレッジが併設される予定とあっては、名前だけのカレッジで内容はカラッポという事になる恐れがある。もしカレッジが正式に設置されたならば、JOCVから電子隊員派遣という事も考えなくてはならない。実際問題として二つ以上の科の兼任という事は非常に難しく、どちらかがうまくゆけばという事では両方も駄目になる危険性がある。

N 環境整備に関して

私が当校 A. S. A. T. に赴任した当時驚いた事は、一つの教室で4クラスが同時に授業していた事だ。これがもし日本であったならば、とても考えられない事である。例えば電気科では種々の機材を使用しているが、その珍しさの為に他のクラスの生徒がそちらに気を取られてしまったり、自分の授業に気を集中出来ないといった有様で、また電気実習の時など他のクラスの生徒が周りを取り囲み、どれが自分の生徒だかわからなくなってしまうと同時に電気という安全面からみても早期改善が望まれた。

対策としては間仕切りを作る事によって各クラスを独立した部屋にし、他の生徒、騒音のシャットアウトを図る事にし、学校側に協力要請したが、定期的に予算が一番厳しい時であった為、JOCVに相談して何とか予算の都合をお願いして材料を購入し、当校のビルディングコンストラクションの生徒を使って作らせた。



(斜線の部分が新設された間仕切り)

その結果授業環境が格段と良くなり隣接するクラスの雑音も気にならず以前よりは相当落ち着いた環境になったと同時に、先生も自分独自の部屋という意味から整理、整頓を心掛ける様になった。

V 冷凍関係プロジェクトについて

1. 当地アブラに於けるこの種の業種の必要性

数年前アブラが総合電化計画の実施によって、プロビンスの約6割が電化され、住民の生活様式が一変した。T.V.、ラジオを始め、電気冷蔵庫、エアコン等の家電品が相当多く使われ始めているのが実状である。特に電気冷蔵庫などはすでに電化される以前から自家発電によって使用されていて、今日に至ってはその数は相当なもので、またエアコンに関しては事務所関係だけでも相当数入っている。しかし一番の問題はこれらの機器が故障した時でアブラでは修理は無理で、特にフロンガスの封入、入替えとなったら遠くマニラ迄運ばなくてはならないというのが実状である。私自身この2年余りの間に数回修理を依頼されたが、自分としても殆んど知識が無かった為に応じなかった。

そのようなわけで約1年半程前から当地アブラにこの種の技術者の必要性を大変に強く感じ、また、それらの技術者養成が唯一の職業訓練校であるA.S.A.T.の役割ではないかと思い、去年の5月から新プロジェクトとして準備を開始した。

2. 設立準備

計画当初は完全に独立した、新しい冷凍科として発足するべくプロジェクトを進めていたのだが、マニラ事務所、学校と相談した結果、時期的にまだ早い様子を見ながらという事から、当分は電気科の1セクションとしてカリキュラムに組み入れ生徒に教えていくといった格好にした。

このプロジェクトに必要な工具、機材及びその収納用の部屋の製作をまず進め一応新学期の始まる6月中旬迄に間に合わせる事が出来た。機材については大きな物が多く、真空ポンプ、電気溶接器、アセチレンガス溶接装置、チャージングシリンダー等約15,000ペソをJ O C Vと学校の間ではほぼ折半という事で購入した。

3. 新プロジェクトをスタートさせて

去年の6月から一応スタートさせ、生徒、カウンターパートは全く新しい分野という事もあって非常に興味をもっており、特に真空引、フロンガス封入に関しての技術的な質はかなり上った。私としてはこの冷凍に関

しては全く素人で何の知識も無かった為、本によって自分も勉強しながらといった感じでやっていた。最初は銅管を接続する為のアセチレンガス溶接方法、電気溶接、銅管加工について主に教えた。またこれらに対しては私自身日本にいる時からかなり経験していたので問題はなかったのだが、冷凍の本筋である所の真空引、ガス封入段階になって本で得た知識だけでは実際自分が手に取って行なった場合どうしても違いが生じ、何度試みても思うようにいかず、半ばプロジェクトの進行が行き詰まった感じであった。そんなわけで吉川隊員(N.M.Y.C. 冷凍空調)に1週間A.S.A.T.に来てもらい、技術的アドバイスをもらった。

最近になってやっと修理の技術的な勘所をつかめた感じでインストラクションを作成して一応カウンターパートに引き継いだ。自分もやっこの分野に関して明るくなって来た折だけに、最近迄できなくて残念に思っていたが、いずれにしてもこのプロジェクトだけは続行して成功させる事を切望する次第である。

計画していたプロジェクトで任期中に実現できなかったもの

この件については、私が前任隊員から引き継いだ時にも彼から提案されていた事項であるが、それは配電線架線トレーニングを当校A.S.A.T.にて実施しようというもので、私自身この種の経験は持っていたし興味もあったので、約1年前にこのプロジェクトに関する具体的な設計は終了したが、予算がかなりの額必要であった為実施には至らなかった。だがこのプロジェクトも冷凍と同様、同地アブラでは必要性が高く、特に今アブラにある電力会社からも要望されており、会社からもいつでも協力してもらえらる態勢にある為、何とか交代隊員により実現して欲しい。

学校側のプロジェクトに対する協力姿勢

2年4ヶ月間、自分がA.S.A.T.にて活動してきた間には学校側との間に数々の難しい問題もあったが、その都度解決してきた。また学校側はJOCV隊員に対し大変に協力的であったという評価になろう。もともと赴任当初は我々のコミュニケーションギャップの為に誤解もあったが、その後大した問題もなく活動出来た事はJOCV事務所の隊員に対するサポートも大きい。やはり受入先の協力姿勢がしっかりしていた事もある。それ故に私も自分の交代要員を安心して要請できたし、安心して学校を去る事ができる。だ

から私の場合赴任当初は別として、この2年4ヶ月の間、ほぼ自分のペースで仕事が出来たと思っている。またそれにはJOCVマニラ事務所、A.S.A.T.の協力もあるが、私の前任隊員であった所の望月氏の学校に対する信頼の厚かった事も忘れる事は出来ない。

今後、後任隊員、学校側に望む事

今迄私がA.S.A.T.にて行なってきた事は前に述べた通りだが、その内私が一番力を入れてきたのは冷凍関係プロジェクトであった。またこれについて独立したコースにしたかどうかという事には大変に難しい問題も生じてくると思うが、このプロジェクトがどんな姿に学校で進められようと、このプロジェクトだけは是非断やらず事なく続行されて欲しい事を切に望む次第である。またそれには学校側のサポート無くしては考えられず、今迄の協力姿勢を崩す事なく隊員をサポートしてもらえ事を望む。

私としてもこのプロジェクトの確かな見通しをつけて帰国したかったのだが、休職参加という身分措置の為4ヶ月半という任期延長が精一杯で、最近になって軌道に乗ってきただけに本当に残念だと思うが、何とか私の後任者である赤坂隊員によって、彼の任期中に完遂させてもらえればと思っている。

また配電線架線トレーニングも隊員がA.S.A.T.に入った当初から計画されていたプロジェクトで、これらを今回はメインプロジェクトとして推進してもらいたい。またこのような地域と調和した地元工業教育の推進の認識を今のA.S.A.T.に望む次第である。

任期を終えて

私がフィリピンに派遣されてから2年5ヶ月、自分では全く信じられないようなスピードで時が過ぎ去り、今日無事に任期を終了する事が出来た。

今想い出せば、私が協力隊について知ったのは高校を卒業して2、3年後、社会人になってからであり、当時幾度か応募しようかと思ったが、機会を得る事が出来ず、自分をもっと若い時期に参加する事が出来なかった事を本当に残念に思っている。だが今回自分が参加して、また任期を終了してみても当年32歳ではあるが、本当に良かったと、今改めて感じている次第だ。私は自分自身が協力隊に参加したが為に失った物もあった。だが、それ以上に、この協力隊参加を通して得た大変に貴重な体験は何物にも換え難い事だと思っている。自分としては此の貴重な体験を自分の今後の人生に於いての活力

として活かしていくよう決意を新たにしている次第である。

私がこの2年5ヶ月の間無事に協力活動を続け、そして終了させる事が出来た事は、東京協力隊事務局、フィリピン駐在員及び調整員、また各関係者の皆様方の御協力、御支援があったからこそだと思います。またそれに対し深く感謝致している次第です。

どうも大変に長い間有難うございました。これにて任期を終了させていただきます。

日本に帰って考えること

中 村 和 弘

青年海外協力隊員として自分の任地であったフィリピンのアブラ州バンゲットにある工芸学校に於いて実質2年4ヶ月間協力活動し、無事任期を終え、日本に帰国してからすでに数ヶ月の歳月が過ぎた現在、以前の帰国当時の様な任務を遂行し得たというものからくる強烈なる満足感その他の印象は、実際のところ日が経つにつれて薄れているが、逆に協力隊に参加し、任務、任期を遂行したという事実は自分自身を以前に比べ一層強く、また生活する上でのたくましさを増してくれた様に思える。確かに協力隊は一般的見地からみた場合、開発途上国の経済援助を通じて平和友好の維持確立を目的としていると思うし、またそれが本質的なものであるのが当然だといっても当り前の事かもしれない。だが我々個人からみた場合協力隊に参加するのは自分自身の為だと言っても決して間違いではないし、それには本当に大きな意義がある様に思う。事実私の場合も帰国した時に強く感じた。所で残念な事に今の日本社会ではとかく新しいもの変わったものは素直に受け入れてもらえない事も多く、理解されるチャンスも少ないのが実状の様だ。だが、たとえ自分がこれからやろうとする事、自分がやった事を他人が理解せずとも、してもらえなくとも、自分の青春を思いっきり燃焼させたなら、直ぐならずとも後に自分の人生の上で大きな生甲斐として現れる事だと思う。協力隊に参加する意義はそんなところにもある様に思えた。

また任期中はプロジェクトの成功か否かで協力活動が評価されるし、またそうであっても協力隊の本質からみれば当然と言う他はないかもしれないが、しかし任地に於いていかに充実した生活、現地民に溶け込んだ生活を送ったかという事も隊員の協力活動の評価として認められるべきであり、意義ある2年間にする為にも重要な事である様に思える。だが実際私の場合任地にて部屋を借り一人で生活していたが、食事も日本から送られてきた材料で日本食を作り現地食はなるべく避けていたのが実状だった。それで自分が今帰国して思う事は、何故もっと自分も現地民の中に入り込み、食事でも何でももっとフィリピン人に近い生活をしたならばもっと彼らの心、習慣を理解する事ができたのではないかということである。またそうした方が現地における協力隊活動とい

うものをいっそう感慨深いものにしたと思う。また任期中は時間の許す限り他の隊員の任地を訪問し隊員のプロジェクトの理解と見聞をより広く求め、また隊員相互のコミュニケーションを計る事は協力活動、現地生活を意味深いものにする上でも重要である。そうした様な事が任期を終え帰国してからも結構強烈な印象として自分の中に残っている。また一般的に地方に於いて数人で同じ任地に派遣されている隊員の場合、どうしても頻繁に日本人同士で集まって話しがちである。話題も自然と少ない狭いものになってしまい、一見小さな日本人社会を形成してしまう傾向にあり、特にそれを現地人からみた場合異様な閉鎖社会の様に思えるらしいので望ましい事だとは言えない。

よく2年間の隊員生活は長かったか、短いものであったかと言う事を聞かれるが、それはそれぞれの隊員がいかに関地で充実した生活、有意義な活動をし、また帰国後その事が自分の仕事のみならず、人生の上に少しでも活かされプラスになっているのなら、2年間という任期は感覚的に非常に短いものであろう。私の場合正直なところ半ば惰性にながされて生活し、時が過ぎてしまって気がついたら任期が終ってしまったと言うのが実状である。たった730日、出来る事なら1日1日をもっとも大切に過ごせばよかったと任期を終え帰国して数ヶ月を経過した現在も思っている。

任期が終了して帰国してから、ああすればよかった、こうすればよかった、またあれは間違っていたと言う事は、やはり人間の欲望からくるものであるかもしれない。だがそれによって我々はフィードバックされ進歩するものではないだろうか。2年間異国の地で燃やした青春、私にとって決して無駄ではなかった。

中村隊員の報告書を読んで

堀 江 博

本隊員の在任中にやった主な事項は、

- (1) 電気科については、工具及び機器等の保管庫を教室の近くに移し、工具類の保管を日本の工場等でもやっているように、板に工具の形を絵で示して、これに各々の工具をかけるようにしたこと、同時に不足工具の補充をしたこと。
- (2) 電子科の必要最少限の機工具類をそろえたこと。
- (3) 各教室間の間仕切りを作って、他のクラスに邪魔されないで授業ができるようにしたこと。
- (4) 冷凍科の開設準備及び開設したということで、非常に広い範囲の仕事をやったわけで、本人の経歴等から見ても、よくやったと感心した次第である。やはり開発途上国では、電気屋と名がつくと、強電から弱電まで広い分野をカバーせねばならないことが多いようで、隊員にとっては大変なことである。特に冷凍科に至っては、日本では電気屋の分野ではなく、むしろ機械屋の範ちゅうに入るもので、この分野まで電気屋がやるのは、後続隊員のためにも得策ではなかったと思う。本隊員の経歴からすると、その得意とする配電架線トレーニングの方に重点をおいた方がよかった。国によって異なるが、開発途上国においても、日本程急激ではないにしても、徐々に必要とする技術、技能の内容が高度になってきている。一方、日本国内においては、職務の内容が、ますます細分化されてきているので、今後は、現地の要請内容を事前によく調べて、各々のニーズにマッチした派遣ができるように努力したいものである。現状では、経験の浅い若い隊員に、余りにも多くを期待し過ぎているのではないかと思う。

次に、現地では、計測器及び機器等の使用法を熟知していないということであるが、私がインドネシアのバンドンの訓練校に行った時のこと、日本及び西欧諸国から送られた計測器類が使われないでほこりをかぶっていた。

これについて尋ねたところ、使い方を知らないからとのことであった。こんな時日本人なら、取扱説明書をあちこち調べて、何とか使いこなすものと思ったことがある。こういう点が日本的物指では計り得ないことであるが、この

ようなためにも隊員の派遣を必要としているのであり、この場合、使用方法を知らない物は、積極的に、しかも、何度も繰返して使ってみせ、また、やらせて見て、自分の力で何時でもできるようにしてやるのが大切である。

また、訓練生については、日本でも、職業訓練校の生徒の中には授業態度の悪い者が多く、訓練校によっては、技能を覚えさせることより、生活指導面に重点をおかなければならない場合が多くある。この点、隊員にとっては、言葉の問題、社会、風俗及び習慣の違い等があり、生活指導面までは手がまわらないかも知れない。

指導員の質について一つ言えることは、開発途上国では、有能な人材が職業訓練に集りにくいということがあるようである。少しでも仕事を覚えると、より給料の高い企業等へ移ってしまうことがその要因のようである。

杉沢隊員の報告書についても書いたことであるが、どうも、隊員は、現地のほんの一部分を、わずか2年位見ただけで、その国全体の判定を下し勝ちである。なる程、アブラにおいては大きな変化はないかも知れないが、フィリピン全体が20年間も、何も変わっていないと断言するのは早計に過ぎることである。これは、この国の経済白書の類を見れば、この国がどれ程、20年の間に発展したかわかるはずである。(青年海外協力隊技術専門委員＝電気工事)

現地人カウンターパートとともに

総合報告書 (52年4月~54年8月)

54年8月23日記

派遣国 フィリピン 51年2次後期組
職 種 自動車整備
氏 名 小松原 道 男
配 属 先 Surigao Del Norte School of Arts
and Trades, Surigao

小松原隊員の略歴

氏 名 小松原 道 男
生年月日 昭和28年7月4日
出身 県 群馬県
職 種 自動車整備
派遣期間 52年4月~54年8月

1. フィリピンの第一印象

先輩の高浜隊員（建築設計）と52年の6月中旬、マニラでの最終オリエンテーションを終えて晴天のスリガオに着く。正確に言えばそれは第一印象ではない。なぜならば現地オリエンテーションの際、すでにスリガオを訪れているからである。この時の印象が私のスリガオでの第一印象である。飛行機を降りて任地入りした時、短時間ではあったが、以下の事を思い感じた。

- ① スリガオにも多くの住民がいるけれども、私もその一人として、ここで生活し隊員として活動しなければならない……という使命感。
- ② そのスリガオの人々とうまくやって行けるのかな？……という不安感。
- ③ それと、すでに3人の隊員も生活している事だし、何かあったら先輩に……という依存心。

以上の3点を段階的、なおかつ短時間にて感じた。

2. Surigao Del Norte School of Arts & Trades (SNSAT) の印象

今、思えば、自分があまりにも恵まれた教育環境の中に育った事を確認するものだった。SNSATは創立以来9年以上過ぎているが、今だに完成していないのが現状である。これは、SNSATに限らず他の公立校にも同じようなケースがある。生徒の増加率（SNSATの場合、52年から54年で5.4割増し）を計り、それに見合った学校施設を持ってもらいたい。この問題は学校予算からくるものだけでもないと思う。長期にわたる学校建設計画を密に立て将来の為に建設してもらいたい。教師の数を増やすのが難しいのなら、最少限の机、イス等は揃えてもらいたい。自動車科のショップを見ての第一印象は、多すぎる生徒と狭すぎるショップという事だった。この第一印象より私の活動は始まった。

3. 自動車科ショップの環境整備

私が赴任した時の自動車科ショップは、第一印象の通り、生徒用の机、イスが全く足りない状態であった。具体的には、5人用の長イスに8人が無理して座り、後に3人位座れない生徒が立ったまま授業を受けているといった状態だった。そのような状況で生徒が熱中して勉強できるはずが無い。対策として、古材を使って生徒達の手で不足の机、イスを製作した。ショッ

ブの裏に山積みされていた古材のみ使用したので特別な出費はなかった。その当時は52年度の生徒数に合わせて作ったので、最近また不足を感じてきた。この分だと、毎年新年度の始まりは机、イス作りからスタートするようだ。

机、イス作りで味を覚え、次に整理棚(机)兼教材置きテーブルを三つ製作した。この仕事は3人のカウンターパート全員に頼んで、仕事を進めてもらった。その結果、机、イス作りの時より速く完成してしまった。後に私は3人のカウンターパート間に競争心があったのに気が付いた。その時何となく嬉しく感じた。整理棚を作った事によって、床に直接置かれていたスクラップの山が一部教材として使え、整理棚の上に並べられた。教材の整理整頓及びショップ美化という面で向上を計った。以前より報告しているように自動車科のショップ面積は極端に狭く危険度の高い実習を行なっている。ショップ面積を有効に使う目的で行なった整理整頓だけでは、限度がある。従ってショップの拡張は絶対に必要になり、それによって安全作業等も保証される事になる。安全作業をするには、ゆとりを充分に取らないと実現しない。早急の処理を望むものである。案としては、ガレージを建設し、それを兼実習場として使えば2倍の効果が出るはずだ。

4. 主な活動

2年余を通し、幸いにもカウンターパートだけの的を絞り活動出来た事を嬉しく思う。生徒達に教えた時はあくまでもカウンターパートの手助けとして授業に臨んだ。カウンターパートの3人は個人差はあるけれども、性格的に問題が無く、それだけでもラッキーであった。その3人の中で理解力が一番高い人が一番若いカウンターパート、そして一番向学心が強い人が中堅のカウンターパートとなる。重要な私に対する協力度は3人共に高く、仕事に関しての問題は会話を持って対処した。今思うに、私はカウンターパートを対象として正解であったと思う。仕事の楽しさだけを考えたら、生徒を直接指導する方がはるかに楽しい。これは助手的に生徒を教えて気が付いた。よって、カウンターパートが下記の条件下に入るならば、JOCVはカウンターパート養成に力を入れるべきであると思う。

- ① やる気があるか？
- ② 向学心を持っているか？
- ③ JOCVに協力的か？

フィリピンⅢ……現地人カウンターパートとともに

カウンターパートが技術的問題を完全に理解した時、生徒に対する授業は素晴らしい物であった。これは表面的でなく内容が良い物であったという事である。これは私がここフィリピンで4～5年間活動し続けても、出来ない芸である。これは言葉だけの問題でなく、教えるテクニック、教授法にも大いにかかわる。どの隊員も自分の技術を最大限伝えたいと考えていると思う。その最終目的は何か、効果的方法は？ 一つ考えて見る必要があると思う。私の場合、カウンターパートに全力を注ぎ込んだ。

◎ カウンターパートを対象とした授業内容。

カウンターパートの空時間を使って1日最低1時間の授業を実施した。カウンターパートを教えるに当たり適当な英文教科書が無かった為、参考書及び資料作りを並行して授業を進めた。この参考書、資料作りに1ヶ月を費やし、カウンターパートへの授業は2週間で終わった時もあった。毎日が資料作りであった。この参考書、資料作り及び収集はたいへん時間のかかるもので苦勞した。完成もしておらず、完璧ともいえないが、何らかの形でカウンターパートの手もとに残るので私は満足している。私の活動時間の半分以上はこの参考書作りに当てた。

◎ カウンターパートへの授業終了後、彼らの理解度を確認する意味で、下記の項目を実施した。

① ベーパーテストによる理解度確認

私自身、カウンターパートにテストを出すのは抵抗があったけれども各人が承知したので数回実施した。当初、記述、論文形式を一部取り入れ各人の理解度を文章にしてもらった。その結果、この方法は誤解度の判断には良いが、肝心の理解度の判断が非常に難しく、あまり良い方法でないのに気付いた。後に、その方式は完全に取りやめた。次に、答えが一つだけ出てくる計算問題及び空らん穴うめ方式を取った。この方式は採点も簡単で、なおかつ理解度が点数となって正直に現われたので、私自身及びカウンターパート各人ともに参考になった。この方法は最終回まで続けた。

② カウンターパート同士が互いに講義し合う。(弱点の発見と理解度確認)

この方法は、毎日行なわなかった。私のカウンターパートに対する授業で欠席者がいた場合、その欠席者に対して私以外のカウンターパートが、次回の講義の時間に復習の意味で講義を持つという方法だ。

その時の私の仕事は彼らが誤解していないかをチェックする事。この方法を取り入れてからは、授業の進展スピードは落ちたが、より充実した講義を持つ事が出来た。当初、あせって一方的な講義をしていたがそのような事は無くなった。この方法はカウンターパート自身に本人の弱点及び理解度を自ら解ってもらうという点では良い方法であった。カウンターパート同士、講義し合う事はお互いに気恥しい思いがあり、あまり盛り上がらなかった。

㊦ カウンターパートの授業参観

カウンターパートの生徒に対する授業を参観し、誤った事を教えていないかどうかをチェックする。もう一つ大切な、カウンターパート自身、どれだけ知識の整理をし、多種類の生徒をどのように操作しているかを見る為である。つまりカウンターパート達は私の授業から得た新知識を整理し、教授法を自分で工夫し生徒達に技術・知識の伝達をするわけである。

㊧ 以上のカウンターパートとの活動の他にプロジェクトとして下記の物を製作した。

① モデルエンジン2基(トヨタ2Rと12R)

使用目的：エンジン点検・調整及び電気系統の訓練に当てた。

当初、カウンターパートのみ使用を許可したが、カウンターパートの技術習得後は生徒が使用する事も許可し、生徒の授業にも使った。

② エンジン・オーバーホールスタンド1基

使用目的：効率的なエンジンオーバーホールを行なう為。

54年2月、カガヤンディオロ市で開催された技能競技会及び工業展示会に出品した物で、この1号基は欠点も多く、使い安さ、安全性の面で改善が必要。また多種エンジン使用可能にする為、エンジンに合った多種類のアタッチメントが必要になる。

③ 電気系統のシステム板

使用目的：全電気系統の集中モデル板で、目で見て自動車の電気を理解してもらう。

この品も工業展示会に出品した。

④ 掛図の製作

どこの学校もほぼ同じような方法で授業をしていると思うが、S N S A Tでは一人の生徒が黒板に教科書を写す。その生徒が書いた黒板

を全生徒が写すというやり方である。文章はともかく図解まで写すので時間がかかるし、チョークのムダにもなる。そこであらかじめ選び、使用頻度の高い図解を抜き取り、掛図を作った。この掛図は裏面がベニヤ板で出来ており全体をナイロンでくるんでいるので半永久的に使えらると思う。もともとは、カウンターパートへの授業の時、見せる図解が何一つ無く、手作りの掛図を描き始めたのが、事の起りである。以後、カウンターパート用に作った掛図でも、カウンターパートの説明のもとに生徒達にも理解してもらっていると確信している。

5. Region 10での第一回技能競技会及び工業展示会

54年2月にRegion 10は他のRegionと同じように技能競技会と工業展示会を開催した。その時の責任者がSNSATの校長Solana(ソラナ)氏であった。ソラナ氏はその技能競技会及び工業展示会についての情報は前年(53年)の11月頃から流していた。そして最終的に競技会の開催が決定しJOCV隊員に技術面での協力を求めたのは、54年に入ってからであった。私は当初準備時間が極端に少ないので、協力するのをためらった。しかし、再々にわたる熱心な校長のヤル気を見せられたので協力する事にした。よく考えて見ると、この競技会及び展示会は私達にとって利点が多く引き受けてよかったと思っている。この時期に合わせ、以前に無かった数点のスプアーパーツを購入する事が出来た。と同時に、展示会に出品するという約束で教材を製作する事が出来た。

工業展示会出品作

- ① トヨタ2Rエンジン
- ② 電気系統のシステム板
- ③ エンジンオーバーホールスタンド

以上の3点

この技能競技会は当初全国大会まで進める予定であったらしいが、第一回の54年は実現されなかった。以後もこのような競技会を開催する予定があるのなら、計画をきちんと立て、国レベルで統制のとれた技能競技会をもつて欲しい。この種の大会は、参加する生徒(選手)はもちろん学校に大きな利点を与える。つまり参加予定選手は大会に備え、当然訓練されると思う。もうすでにその訓練過程においてその生徒に大きなプラスとなっている。

また、もしもその大会で優秀な成績を残す事が出来れば、生徒自身に自信と希望を持たせる事になる。学校側も大会に参加する以上、最低限の設備、機材を投入して選手の訓練に当たらなければならないので、学校設備の充実にも一役かっている。その他、目に見えない効果が附随して出てくる。

まだ若いこの大会の意味を理解してもらい、国レベルでの技能レベルアップにもっていってもらいたいものである。

6. JOCV に対する学校の理解と協力について

2年間の活動を通じ、学校側の JOCV に対する信頼・理解と協力を心から感謝したい。カウンターパートはもちろん一般職員のプライベート面での助けは口では言い切れない物がある。特に、私が下宿探しに苦勞していた時 SNSAT の一教師が自分の家の一部屋を提供してくれた。また、私が病気になった時、毎日入れ替り病院を訪ねたのは、ほとんどが SNSAT の職員だった。そんな忘れたい経験を SNSAT の職員達と持った。赴任1年後で本格的な活動に入った。その頃私が計画していたプロジェクトの承認を得ようと校長に尋ねたところ、返事は OK。その頃の校長の承認率は 90%以上あったと思う。アイデアはいつも 100%賛成の完全なものだった。ただ金のかかるプロジェクトが非承認になった。SNSAT の JOCV 隊員は他の SAT 系隊員より、色々な面でラッキーと思わなければならない。なぜならば校長以下の教師及び職員が好意的である。これは表面的な物でなく、何か問題があったら相談相手になってもいいという人が多いという事である。もちろん重要な相談は相手を慎重に選ぶ必要がある。また、カウンターパートに関して…… SNSAT の JOCV カウンターパートは各科共に複数なのでカウンターパートで失望する事が少ない。私が判断する限り現在の JOCV カウンターパートは各科共に最低一人。人間的にりっぱで比較的優秀な人がいる。最後に金銭的な事で、ソラナ氏は 54 年度用 JOCV 隊員活動資金を一人当たり、10,000 ペソ用意している。この額は決して高額ではないが、これで最低の線は保証された。

つまりプロジェクトの重要性、必要性をソラナ氏に理解してもらえば、10,000 ペソ以上の金を引き出す事が出来る。これは私の経験から言える事だ。私の場合引き出した総額は 20,000 ペソ以上になった。その時の JOCV 隊員への額は上限 8,000 ペソのみであった。54 年度用の 10,000 ペソは目安と思ひ、大いにプロジェクトを進めてもらいたいものである。

SNSAT 校長ソラナ氏は、学校を SAT 系内でミンダナオ島にてトップレベルにしようと意欲的だ。以後、SNSAT と JOCV の相互理解のもとでの発展を期待するものである。

7. 職業訓練校における普通科教育とショップ教育のギャップ

自動車科には 3 人のインストラクターがいるが、3 人の経験及び能力はそれぞれ違った物を持っているので、上と下でかなりの開きがある。また MEC (教育文化省) でカリキュラムを決めていないので、授業内容は当然教師次第、各自気ままに授業をしているといっても過言ではない。いくらインストラクターが適当な授業をやっているとしても生徒からの反発はもちろん無いし、カリキュラムが無いのだから学校からの指導も無い。いいかげんのインストラクターに当たった生徒は運が悪いといって泣き寝入りするのみで、私たちの仕事は、ただヤル気のあるカウンターパートを技術的に伸ばしてやる事だ。

隊員の中には専門から離れ数学・物理・化学等の普通科基礎学力向上の為、時間を費やしている隊員もいる。特に電気関係隊員の数学指導は大きな問題であると思う。この辺でフィリピン政府 MEC も内容のあるカリキュラム完成に力を入れるべきである。小学校から大学までの一貫したカリキュラム及び職業訓練学校の普通科教育とショップ教育の関連したカリキュラムが早急に必要である。職業訓練学校用に一貫したカリキュラムを作る事によって、現場の教師の負担が減り、教授法のバラツキが無くなる。従って生徒は統制の取れた授業を受ける事が出来る。

8. 日本及びフィリピン中央でのカウンターパート訓練——3 人のカウンターパートを OMSD に送って

54 年度の夏季休暇を利用して、マニラ OMSD において、3 人のカウンターパートを研修させる事が出来た。3 人中 2 人は学校経費で送るだけの資格が無い為 JOCV 負担で参加した。研修後のカウンターパートの仕事を見て (但し 3 人中一人は技術研修員として福岡県で研修中) 特に若いインストラクターを中央に送り研修させる事は効果的であると思った。その若いインストラクターは本人の弱点を発見し、同時にマニラのインストラクターと技術的なギャップはあまり無い事を見出した。彼はこの 1 ヶ月半の研修で大いに自信がついたと言った。

特に JOCV と関係しているインストラクターは自信過剰になりがちだ

が、他のインストラクターと同条件で研修に参加し、冷静に自分自身を見つめる事が出来たと思う。研修後、効果的な授業だけを望むのなら、高齢者を送るよりは若いインストラクターを送った方が良策だろう。

但し、ほとんどの若い教師は学校に対して意見力が無いので、急速なショップ改善は期待できない。今年やっと思送る事の出来た3人はショップのチーフ的存在の経験豊富な人、中堅者、それと若い教師と3段階の人を送ったので、送り方としても最良の方法であると思う。職種によっては日本での技術研修は効果が薄いという隊員がいるが、自動車に関してフィリピン人を研修員として送るのは大きな効果が得られると思う。ほとんどが理論中心の電気等の職種に比べ、自動車はまだ機械的職種に含まれると思う。機械的職種では、見るだけでも多くを学ぶ事ができ、触ってみなければ理解出来ない部分が多い。いくら私たちが話しても、見た事のない人には意味がつかめない。とにかく一見してもらおう事であろう。

9. フィリピン人気質と開発

赴任当時の52年と比べ今年54年までの2年間に、確かにフィリピンは少しずつ発展していると思った。特にスリガオに住んでいて、たまにマニラに出てくるとつくづく感じた。街の作りが変わり、車の姿がモダンになり、そして、その数の増え方は発展の良い証拠である。このスピードで発展し続ければ発展途上国のグループから抜け出す日も早くくるのではないかと思う。

フィリピン人気質とフィリピンの発展・開発を思うと疑問もある。各国の援助を受けているが、いつ自立の精神が確立するのか計り知れない。フィリピン全国民が怠け者だとは決していわないが、ノンビリ生活の中にも緊張感を持ってもらいたい。このフィリピン人気質はどこからきたのだろうか……？おそらく熱帯気候から作られたのだと思う。つまり気候は民族を支配し、気候の変化は人間をも変える。

私は以上のような典型的なフィリピン人が好きだ。

小松原隊員の報告書を読んで

上 川 修 二

わが国では単に自動車の整備を行なうメカニックであり、教育の分野にはあまり縁のない小松原隊員が、教育設備或いは教材も乏しいスリガオ・デル・ノルテ工芸学校に派遣され、本来の自動車整備に関する技術協力に加えて、自動車科の全般的な教育指導という職業教育の根幹に係わる困難な仕事にとりくみ、国民性、言語の違い等幾多の悪条件にも拘らず、彼なりの教育指導のあり方を模索しながら、全力をあげて努力し着実に成果を得る様子がよく現われている。

報告書にはあまり苦しみに触れていないが、筆者は彼が在任中の昭和53年に、スリガオ・デル・ノルテ工芸学校を訪れる機会を得、実情を見聞したことから、小松原隊員の苦勞や苦悩が察せられ深く感銘をうけるものである。

ここで、よりよい教育を行なう上での絶対要件について考えてみると、一般に次のようなことがあげられる。

- ◎ 教育の最終目標を想定した適切な教育カリキュラムの策定
- ◎ 教場及び教材の整備
- ◎ 教育する内容に精通し、かつ教育に対する熱意及び指導力を有する教師
- ◎ 生徒の勉学意欲

以上の観点から小松原隊員の実行した諸策について検討を加えてみる。

1. 自動車科ショップの環境整備

実技指導のための実習場の整備であれば理解できるが、生徒用の机或いは椅子作りは、技術協力以前の問題とも考えられるが、このことによって、隊員とカウンター・パート及び生徒、また、カウンター・パートと生徒の間に親近感、運帯感を生じ、以後の活動に大いにプラスになったといえる。

2. カウンター・パートに対する活動(教育)

JOCVの活動は、永久的に実施されるものではないから、協力(指導)の対象をカウンター・パートに絞ったことは適切な処置といえよう。指導の内容としては、自動車に関する技術的事項が最重点であるのはいうまでもないが、教師には専門的知識以外に指導力、教育技術が必要である。これらが総合されて始めて生徒の勉学意欲につながるものである。したがって、学校系に派

選ばれる隊員に対する研修には、専門知識以外の教育要領的な内容が必要であろう。

3. 教材の作成

技術教育には、適切な教科書のほか現物（自動車、部品単体等）、模型或いは掛図等の補助教材が不可欠である。報告書によると、教科書すらない状態で、これらの作成に長時間費したとのことであるが、その労苦はたいへんなものと推察する。このことは、今後の教育成果に貢献するものと確信する。

4. 教育カリキュラム

カリキュラムは教育を行なう上での根本であり小松原隊員の指摘通りである。この点は一隊員として対処できることではないので、JOCVとして検討すべきであろう。（青年海外協力隊技術専門委員＝自動車整備）

テクニカル・コンサルタントとして

総合報告書 (52年8月～54年11月)

54年11月18日記

派遣国 フィリピン 52年1次前期組
職 種 電気機器
氏 名 杉 澤 久 邦
配 属 先 Eulogio "Amang" Rodriguez
Institute of Science and Technology,
Manila,

杉澤隊員の略歴

氏 名 杉 澤 久 邦
生年月日 昭和25年11月23日
出身 東京都
職 種 電気機器
派遣期間 52年8月～54年11月

1977年8月16日、初めての海外生活への期待と不安を抱きながらマニラ空港に到着しました。空港では何でも焦げ付きそうな鍋底のような暑さに驚くとともに、密かにそれ以上の熱いファイトを燃やした第一歩となりました。

到着以来約1ヶ月の現地訓練を終了し、9月中旬より正式に Eulogio "Amang" Rodriguez Institute of Science and Technology (以下 Earist) に配属になりました。しかし私は、ここでの初めての日本人ということであり、また JOCV への隊員要請を直接学校が出したわけではないので、しばらくは煩わしいほどお客様扱いをされました。教育文化省が隊員要請を提出し、配属先を EARIST としたわけですが、学校への JOCV に関する説明が不十分であったため、また私も初代の隊員であるので、今後の仕事のためと考え、色々な習慣の違いにショックを受けながら、互いに相手を知るための観察の時期としました。この間に知ったことは、日本では互いが信頼することにより成り立っている社会ですが、ここフィリピンは信頼しないで成り立っている社会ということでした。信頼しないということはあまり直接表面には出ませんが、自分の物は自分で管理する以外、だれも管理してくれない、という状況から結果的に、信頼しないで成り立っている社会といえるようです。

赴任以来2ヶ月が過ぎた頃よりようやくお客様扱いから解放されましたが、まだまだ何をすべきか、ということについては暗中模索の状態でした。こんなとき授業内容がトランスについてということであったのでカウンターパートの希望を入れ小型トランスの設計手引書を作成しました (Project Plan No. 1)。しかし今になって考えてみると、これはカウンターパートが私の実力を試したようなものでした。なぜならば Electrical Engineer としてはあまりにも若かったためと思います。この国では Engineer はかなり高い地位であり、ある程度の年輩であるのが普通であるためと思います。そこで第一目標として、相手は私よりも年上なので彼を傷つけることなく私の実力を少しずつ示して発言力を増す努力をしてみました。この中には私を通して JOCV を理解してもらうことも含めた形として、そしてそれらの裏付けの一部として No. 1 Project のトランスの試験法、データの分析法等を紹介し、また同時に学校側と交渉し基本的な機材 (交直電流計、電圧計、電力計等) の購入を進めましたが、この交渉に於いて学校側から約 30% の機材及びそれらの管理用キャビネットを拠出させることができました。しかし、赴任以来半年が過ぎたこの頃に一つのスランプに陥りました。それは私が一生懸命やっても、カウンターパートあるいは生徒になかなか理解されないという理由からでし

た。この背景には数学が弱いという理由もありますが、基礎教育の不十分な点が上げられます。しかし現在その頃の自分を考えると、何とか私を相手に認めさせよう。あるいは何か成果を出そうということに躍起になり過ぎていたため、近視眼的になり、大局の目的を忘れてしまった、という自分自身の気持ちの中にも理由はあったようです。

1978年6月よりProject Plan No. 2であるシーケンスコントロールを開始したわけですが、これはこの国では新しい分野ということもあり、カウンターパートの強い希望により導入しました。そして1年が過ぎた頃からようやく私を年下ながらも実力のあるEngineerとして認めてくれ始めました。

1979年1月より4月までは主にシーケンスコントロールに関する授業を持ったわけですが、これが非常に好評であったため夏休みにマニラ近辺の工業学校のインストラクターを招き2週間のセミナーを開催しました。これは教育文化大臣から承認を受けた権威のあるものとしたため、その成果がカウンターパートを始め、校長、副校長を十分に満足させ、またJOCVの評価を上げるためにも大いに役立ったようであります。この準備期間中カウンターパート、副校長そして私とで教育文化省へ何度となく足を運んだわけですが、学校の、そして彼らの名替になることであったので驚くほどよく働いてくれました。またこれと並行してProject Plan No. 3（モーター巻線の設計）を進めましたが、多少遅れてしまい、今後の課題になると思います。

以上によりテクニカルコンサルタントとして確固たる地位を得たわけですが、現在帰国を前にして大局の目的と今後の教育分野に於ける協力活動について今一度考えているところであります。一言で言えば一人でも多くの優秀な生徒あるいはインストラクターをフィリピン発展のために育てる、ということですが、我々はあくまでも陰の力として働く、ということは言うまでもないことだと思います。目的のために現在必要なことはカリキュラムの改善と彼らの意識の改革ということになり、とりわけカリキュラムと規則正しい授業は不可欠の要素と考えております。私は我々JOCVの地位を確立させるため及び興味を持たせる意味においていくつかのプロジェクトあるいはセミナーを行なったわけですが、プロジェクトそのものは手段であり目的ではありませんでした。また本年は6月の新学期より第一セミスター終了まで完全に授業を持ったわけですが、これは基本的な機材がある程度そろった現在、カリキュラムの作成と授業方法を紹介するためでありました。

添付してありますテキストは（注：割愛）この第一セミスターに教えた内容を整理したもので、基本的な理論を実験とともに解説したものです。

教育分野に於ける今後の協力活動は過去の経験を生かし、その方針を新たにすることが必要だと考えます。一部では理数科隊員の導入が約1年ほど前から開始されたわけですが、やはり対象を小・中学校レベルとした数学、一般科学系の隊員を増員することが今後、電気、電子等の工業系隊員の活動と関連し重要となると考えます。

しかし、これは教育の主権問題に絡み別の問題が発生する要素があり、簡単には手を付けることが出来ないと思います。しかし次にあげるような問題点がある限り、基礎的部分（小・中学校レベル）に手を付けないではいけないと考えます。

1. 小学校時代から数学、自然科学等に対する姿勢は暗記することを第一と考え、柔軟な思考力をもって論理的に自然現象を取り扱うことができない。
2. 1.に関連して科学的に自然現象を捉える楽しみ、そして眼前に広がる応用分野での創造の楽しみを知ることができない。
3. 1.2.の結果として、高校レベルでの電気、電子等の工業系が、日本、欧米等先進諸国の製品のコピーを作ることに専念するようになり、いつまでたっても実力が伴わないという乗り越えることのできない高い壁を自ら作り上げる結果となってしまう。

以上3点の問題点を挙げたわけですが、現在フィリピンにて、これらにアプローチ（協力隊として）する道がゼロではないので、次に、私の考えたアプローチの方法を述べたいと思います。

現在フィリピンの教育関係者も理数科が弱いということを認識し、その方面に力を入れつつあるところであり、その動きとして工業系のカレッジに付属のスペシャルサイエンス・ハイスクール等を設置し始めています。私の任地であったEARISTにも昨年度よりその設置が認められ、実質的には今年度より運営されています。私がアプローチの対象と考えているのはこのスペシャルサイエンス・ハイスクールの教師に対してで、それは理数科が弱いと認めながらも、実際にどのようなカリキュラムで、何をどのように、どんな実験を組み入れて教えたらいのか？ということについて全く不十分な力しかないためであります。理数科が弱いと認め、新しい制度が緒についた現在、これを手助けすることは、カリキュラムの作成、実験機材の購入そして楽しい授業を作るテクニック等将来非常に明るい道があるのではないのでしょうか。学校側では（EARIST）、私

の任期中、何度となくこの問題について相談に來たり、ぜひ理数科のJOCV隊員を入れてほしいということをおっしゃいました。以上が私を感じ、考えた今後の一つのアプローチではありますが、算数が弱いと言って來た10年、一つの方
向轉換の時期であると考えます。幸い最近では理数科教師として隊員を目指す青年が多いとの事。またこれに関連し、この国の理数科教師の日本での研修制度の確立も進めたいと帰国に当たり願って止まないところであります。

以上にて総合報告書と致しますが、任期満了に当たり、関係諸官、諸氏に深く謝意を表します。

日本に帰って考えること

杉 澤 久 邦

1979年11月に帰国して以来すでに3ヶ月が過ぎフィリピンでの生活が懐かしく思い出されるようになったものの、同時に不思議な現象に驚きを新たにしている今日此頃である。

この情報化時代にあつて、確かにアメリカ、西欧等の先進諸国の話題は豊富だが、開発途上国に関するものはほとんど無に等しいということである。あるのはわずかにインドシナ難民の窮状を訴えるニュースぐらいのものであろう。しかしこの様な状態であるにもかかわらず一般的な日本人は、フィリピンは遅れた国だろう、貧しい国だろう、と口を揃えて言うのである。どこからその様に判断するのだろうか。確かにGNPは日本のそれとは比べものにならない程であり、日本に居れば死なずにすむ病気で多くの小児が死んでいる。また日本の中学校程度のものを高校あるいは大学で勉強している等々、単純に比較すれば遅れた貧しい国かも知れない。しかし2年3ヶ月間協力隊々員として働いた自分の、「教えたこと以上に多くのことを学ぶことができた」という心の充実感はどこからくるのだろうか。それは彼らから言葉や習慣、そして彼らの文化等、多くのことを学びながら、また自分の持っていた専門知識を多少なりとも伝えることができたためであると思う。

人間という動物は社会生活を営むがゆえに常に他人から認められたい、あるいは受け入れてもらいたい、という強い欲求を持っているものである。しかし、それではどの様にしたらいいのだろうか、という問いに対してはその欲求の大きい割にはわずかな配慮しかしないものである。そして相手が開発途上国となったら尚更ひどいものになる。遅れた貧しい国からは何も学ぶものがないという結果である。

一生懸命教える人は必ずその人を好きになるという言葉がある。逆も真なりで、一生懸命教えを受ければ、やはり生徒は教える方を好きになる。協力隊々員として途上国での活躍を目指すならば、まず一生懸命教えを受けてほしい、現地語でもその国の文化でも、また食べものでも何んでもいい、そのうち必ず何かしら教えて欲しいと言ってくる。それが日本の歌でも、専門技術の一端でもいいではないか。この積み重ねのみが南北問題の溝を埋めることが出

来ると信じている。

夫を亡くした若い母親が自分の体を売ってまでも子供を学校へ行かせている
貧しい国もあれば、育てる自信がないといい我子をコインロッカーに葬る豊か
な国の母もいる。貧しい国のクリスマスの晩にいつもの靴磨きの少年に現地語
で、「今日はクリスマスだから我々が作ったサンドイッチをプレゼントしよう」
とって手渡した。しかし空腹なのにいつまでも食べようとしないので「でき
は悪いが美味しいから食べなよ」と促すと、「ありがとう、帰ってから母さんと
一緒に食べる」といって暗い街角に消えていった。豊かな国で勉強勉強とうる
さい親を殺した少年がいた。めざす学校に入れなかったといって校舎から身を
投げた少年がいた。何が豊かで何が貧しいのか。世界に大きく眼を開き考える
必要があるのではないだろうか。

杉沢隊員の報告書を読んで

堀 江 博

本隊員の在任中にやった主なる事項は、Project - 1, 小型トランスの手引書の作成, Project - 2, シーケンスコントロールの基礎, Project - 3, モーター巻線の設計ということで、これを見ても小型トランス及び電動機の設計, 巻線, 修理法の基本的な知識, 技能が電気機器の職種ではどうしても必要と思われる。日本の工業系統の学校ではトランス, 電動機とも, その理論的なことは教えるが, 実際の修理法に関してはほとんど教えていないのが実情である。各国からの要請内容にはこれがのっていることが多いので, 派遣前に1~2ヶ月の特別訓練をお願いしているケースが多い。この訓練は, 日本の職業訓練でも徐々に少なくなってきたので, これは, 開発途上国向けの Appropriate Technology ということになる。

また, シーケンスコントロールは, 日本の職業訓練分野でも, 現在, 電気コースの花形で, 私の勤務先の職業訓練大学校に再訓練でくる日本人の職業訓練指導員も, シーケンスコントロールの講座の履習希望者が非常に多くなっている。また, 開発途上国からの指導員研修員も, シーケンスコントロールが必要なことはよく知っており, 最初はもっと時間を増やしてほしいと要求するが, いざ始まってみると, 基礎学力及び基礎知識の不足のためもあり, 段々ついて行けなくなる者も多い。このコースは集団訓練のため, 国により, 人によって個人差が大きいため, やむを得ない点であるが, できるだけ, わかりやすい基本的な回路のみにしぼっている。この報告書でも, 初めてのせいもあり, カウンターパート及び生徒も大きな興味を示したとあるが, 当然のことである。

このシーケンスコントロールについては, フィリピンの職業訓練分野の現段階では, やっと, 指導方法でいう導入の段階にあり, 今後もっと掘りさげて役に立ち, 応用のきく知識, 技能に発展させて行かねばならない。

これがためには, 講義ばかりでなく, 簡単なトレーニングボードを使って色々な組み合わせの回路を, 回路図を見ながら, 実際に実習させて, 覚えさせるのが有効である。このトレーニングボードに関しては, 職業訓練大学校で実際に使用しているものがあるので参考にされたい。

私のところでも, 開発途上国からの指導員の研修を始めてから18年目にな

るが、フィリピンからの研修員は、この報告書にもあるとおり、特に数学が弱いようである。この点やはり教育制度に欠陥があるのかも知れないが、しかし、報告書の最後の方にある、第1項、第2項に書いてあるように、はっきり決めつけることも早計ではないか。わずか、2年位の滞在で、その国のごく一部分を見ただけで、経験の余り多くない若い隊員が決めつけるべきことではないと思われる。私がフィリピンからの研修員を見た限りでも、確かに理数科や、理論には劣るが、年配者はそれなりに実務経験があり、実習をやらせると、立派な仕事をする人が多い。また、第3項にある、先進諸国の製品のコピーを作ることに専念する云々ということは、ついこの間まで日本がやっていたことで、開発途上国ではやむを得ないことではないか。

数年前に来たフィリピンからの研修員が、科学技術の発達について、我々には色々なハンディキャップがあるが、自分の国が熱帯地方に位置しているということが、その最も大きなものであるといていたが、そのとおりだと思う。すべてを我々の物指しで計ろうとするところに問題があるので、もっと永い目で見てやる必要がある。

報告書の最初の方に書いてある、フィリピンは信頼しないで成り立っている社会、ということであるが、これは、国全体がまだ物質的に貧しいから物がなくなるので、決して、心の中まで貧しいのではないと思う。私が9年前にこの国を訪れた時、国中から私の教えた子達が集まって来て、洪水で物のない時期にもかかわらず、厚く私をもてなしてくれた。あとで聞いたところだが、フィリピンには *Philippine hospitality* という言葉があるそうで、何をおいても遠来の客をもてなすという、暖い習慣があるとのことで、改めてフィリピン人を見なおした次第である。

フィリピン人は、一般に、南国的で、派手な服装をしたりして、見栄っ張りのところがあるが、こちらから親しくして、心を開いてつき合おうと、明朗で、心の暖い人達である。

信頼しないで成り立っている社会、という見方はあたらなと思う。(青年海外協力隊技術専門委員=電気機器)

印象深い村々での普及活動

総合報告書	
派遣国	フィリピン 52年1次前期組
職種	食用作物
氏名	小瀬川 修
配属先	Agricultural Credit Administration Office, Balagtas, Bulacan

小瀬川隊員の略歴

氏名	小瀬川 修
生年月日	昭和28年6月7日
出身県	岩手県
職種	稲作
派遣期間	52年8月～54年10月

1. はじめに

2年前、マニラ空港でタラップに一步を踏み下ろした途端、どっと吹き出た汗。暑がり性の僕は、これからの常夏の2年間を思うだけで目眩のする思いだった。しかし今、少しぐらい激しい動きをしても汗は出なくなってしまった。今更のように人間の環境適応能力の衰えを思い知らされる。思い起こせば、学生時代に登った大雪の冬山は、その頂でマイナス35～40℃の酷寒であった。そこで僕は毛下着、毛カッターシャツ、薄っぺらのジャンパーの3枚だけで行動出来た。マイナス35℃からプラス30℃への生活の転換は大変に思えたが、体の方が自然に順応してくれた。

といっても最初はやっぱり暑かった。内なるものも燃えていた。正直は最良なりと配属先のスタッフにずばずば批評を浴びせて、彼らを怒らせもした。使命感に燃えすぎて独り相撲をとったこともある。そのうち社交術を身につけたせいか狭くなって、相手に対する言葉を選択するようになった。お世辞、煽て、相槌云々。迎合とまではいなくても、相手を怒らせないように、仲良くやっていけるよう気を使う自分であった。これでいいのだろうか、と自問した。しかし、2年間という短い期間なのだから憎み合いや争いのないよう過ごしたいと思うのも、また然りであった。その結果、生涯にわたってこれからも付き合いであろう友人に対しては言いたい放題を言ったが、2年間だけの付き合いで終わるであろう人々とは、その場限りの繕いの言葉で接することになってしまった。

それで良かったのだろうか。通りすがりのフィリピン人は僕の繕いの行動と言葉から僕を、ひいては日本人を判断したにちがいない。もっと素直に争う時は争い、怒る時は怒るべきではなかったか、などと考えている今日この頃。せめて、この総合報告書だけは素直なモノログにしたいと思う。

2. パルティータ村での活動及び問題点と今後の展望

フィリピンにおけるIR系高収量品種の普及率は6割以上であり、また同国の稲作面積に占める灌漑面積の比率は約4割であるから、今日高収量品種は条件の悪い非灌漑地にまで作付されていることになる。当地はこのことを示す好例で、起伏の激しい丘に大小まちまちの天水田が広がり、そこにIR-36が年1回作付されている。以下に技術・栽培上の問題点、それらにどう対処し、どういう結果に終わったかを述べてみたい。

1) 最適品種の選択

苗は田植えに最適な葉齢に達しているのに、雨不足のため本田準備が遅れ、その結果、適期に田植えが出来ず、老苗を植えて付けているケースがよく見られた。

IR-36のように生育日数の短い(雨期で約110日)、品種は老苗を植えた場合、栄養生長過程への打撃が非常に大きく、個体自体が弱々しくかつ十分な茎数を確保しないうちに幼穂分化期を迎えてしまう。この結果、1株穂数及び1穂粒数の絶対不足から収量は大幅に落ちる。

これに対し、IR-36よりも生育日数で約25日長いIR-42を普及し、老苗を植えざるを得なかった場合の被害をIR-42の栄養生長期の長さでカバーしようとした。しかし、IR-42を植えた場合、出穂開花期が雨期の終わりにあたり、1年目、2年目ともその時期に1週間の長期にわたり全く雨が降らなかった。その結果、空穂が多く発生し、IR-36よりも低収量に終わった。また、農民は、老苗を植えざるを得なかった場合、1株当たりの植え込み本数を多く(7~8本)して穂数の確保に努めていた。

農民の意見も、IR-36の方が雨期の終わりの時期との関連で安心して作れるということだったので、IR-42の普及は中止した。農民の意見にもっと早く耳を傾けていたなら防げた失敗であった。

2) 直線植えの奨励

直線植えを広め、その後の手押し除草機の導入を計ったが無駄骨に終わった。当地の水田は1枚々々が小区画で不規則な形をしており、基本植え、ロープの使用、ラインメーカーの使用のいずれによっても直線植えの導入は難しかった。

ランダム植えの最も問題となるところは除草の難しさであるが、農民は田植え後5日目に粒剤2,4-Dをヘクタール当たり1袋(25kg)散布しており、かなり効果を上げていた。また、ランダム植えといっても、熟練した人夫が植える場合、整然とはほぼ規則正しい間隔(25cm×25cm)で植えていくので疎植になりがちな傾向は避けられていた。ただ人手不足から学童を田植え人夫として雇った場合、未熟さと彼らの早く労働から解放されたいという気持ちが相重なって疎植となる傾向が強かった。

除草さえしっかり行なうなら、直線植えもランダム植えも収量において大差のないことはIRRI(国際稲研究所)の研究からも明らかになっている。当地のように水田1枚々々が不整形で小面積の場合、直線植えは奨

められない。

iii) 化学肥料の施肥時期

尿素 (N:46 - P:0 - K:0) と複合肥料 (N:14 - P:14 - K:14) の併用を奨励したが、農民は最初乗り気でなかった。天水田の場合、施肥した直後の大雨は畔を越えて肥料を流亡させるし、施肥後の水不足は脱窒作用による窒素肥料の損失につながる。農民が肥料使用に不安を感じるのは当然であった。

これに対し、代かきの際、前述の複合肥料を2袋 (1袋は50kg) ハンドトラクターで全層に鋤き込むよう指導した。田植えは、水を張った状態で行なうので、その後少なくとも1週間の水不足の心配はないし、例外的な大型台風の到来を除けば肥料流亡の問題もない。そのため、この元肥の全層施肥は大きな効果があり、無肥水田に比べ苗の活着が早く、収量もヘクタール当たり20~30カバン (1カバンは約44kg) 上回った。

追肥はラジオの天気予報によく注意して、台風の心配がなく、かつ、水田に水がある場合に、田植え後2週間目と出穂10日前にそれぞれ尿素を1袋ずつ施すよう指導した。

元肥の全層施肥は5割が普及したが、追肥の方は2割弱しか普及しなかった。毎年、台風が必ず数回来襲し、逆に水不足のため水田が干されることが2、3回ある当地では、この普及度で、さもありなんと思う。

もう一つ、水田にたまった水を逃さないために、畔塗りを丁寧にやり、また、カニやネズミによる穴を見つけ次第直ぐ泥でふさぐようにアドバイスした。

iv) 短冊揚床苗代 (床幅120cm, ミソ幅30cm) の普及

当地の苗代様式はいわゆる“べた播き”であったので短冊揚床苗代の普及を試みた。しかし水深の管理が出来ない当地では、この苗代様式の利点を活かすことが出来ず、収量的にも“べた播き”苗代と変わるところがなかった。見た目にはベルト状の短冊揚床苗代は美しいけれど、手間がかかるし、収量増加をもたらさないで全く広まらなかった。

播種量に注意し、徒長苗を防ぎ、かつ、苗を傷めない丁寧な苗取りを実行するなら、天水田の場合“べた播き”でも問題はないと思う。

v) 病虫害防除

害虫の主なものは、メイチュウ、ツマグロヨコバイ、カラバエ、タテハマキムシであった。農民は充分とはいえないけれど、随時発生状況を見て

殺虫剤を散布していた。特に移植2～3日前に苗代で徹底駆除し、本田に害虫を持ち込まないようにアドバイスした。

病気は白葉枯、稻熱、胡麻葉枯が若干発生したが、収量に大きく影響する程ではなく、かつ、殺菌剤は高価なため、これら病気に対する農薬散布は一切していないし、今のところ、その必要性もないと思う。

vi) 今後の展望

現在、無肥料で平均40カバン取れている。有機物を入れてもいないのに毎年これだけ取れるのだから大したものである。無肥料条件下の連作で土地が瘠せるのではないかと、という心配があるが、案外有機物は自然に供給されているということがわかった。

フィリピンでは一般に収穫の際、高刈りが行なわれるので、かなりの量の刈株が水田に残留し、翌年の荒起こしと代かきで土壌中に鋤き込まれる。また、本田準備を始める頃には、雨期の開始とともにびこり始めた雑草で水田は緑一色なのである。この雑草が緑肥としての役目を果たしているであろう。だから、毎年無肥料でも40カバン取れるのである。

だが、これで満足してもらっては困るし、もっと取って欲しいのである。それで前述したように元肥として複合肥料をヘクタール当たり2袋全層施肥すると、60カバン取れるのである。更に田植え後2週間と出穂前10日に尿素をヘクタール当たりそれぞれ1袋ずつ投入すると、80～90カバン取れることはわかっているのだが、これはあくまで大雨による肥料の流亡がなかった際のことなので、農民は追肥のアドバイスにはついてこなかった。

天水田であるので目標は80カバンの元肥全層施肥の励行、かつ、天気予報に細心の注意を払って適時追肥する。これが当地で出来る最大のことだと思う。

3. テレパチオ村での活動及び問題点と今後の展望

当村はサンイルデフォンソ町から約5km西に入った地点にあり、その中を灌漑用水路が通っている。しかし、この用水路が役に立つのは雨期作だけで、2回目の作付の後半は毎年水が潤れるのが常である。よって農民は1回目に全力を尽くし、2回目の作付では、雨期が例年より少し長かったら儲け物という感じで直播きを慣行としている。

i) 耕 深

本田準備として水牛に引かせた犁で耕起を行ない、整地、代かきはハンドトラクターで行なうが、そのため耕深は12～13cmしかない。大型トラクターの採用により耕深を深くし、稲の根圏範囲を広くしたいが、金銭的に大型トラクターの借用は1回の荒起こしだけでヘクタール当たり260ペソもするので不可能な状態に近い。また大型トラクターの導入は土地を持たない農業労働者の収入源を断ち切ることにもなる。よって、耕深の問題は今のところ解決される見通しはない。

ii) 水田の見回り

もっと頻繁に田んぼを巡回して欲しいと思う。少なくとも早朝、夕方の1日2回は自分の水田を回って水の深さ、稲の状態、病虫害の発生等をじっくり時間をかけて観察して欲しい。

田植え後の大雨で稲が水没しているのに、主人は隣人とおしゃべり中でそれに気がつかないでいる、といったケースがよく見られた。もっと自分の稲に愛着をもって欲しいものである。

iii) 出稼ぎ者の増加

現在、当村から6人の農民がサウジアラビアに出稼ぎ中であるし、7人がすでに1年の任期を終え帰村している。基本給が月\$450で食費・住居費がフリーとなっているのでは大きな魅力である。帰国の際、彼らは沢山のお土産を持って帰ってくる。帰国してからというもの毎日酒盛りで、隣人、親類、友人に振舞うのである。

僕としては、出稼ぎで貯えた金で地主から土地を買って欲しいのであるが、ヘクタール当たり10,000ペソもするのでは尻ごみしてしまうのが普通である。それに当地の地主の取り分は固定制で、1年にヘクタール当たり15カバンと比較的低いので、小作民も土地を買う気をおこさない。

彼らは貯えた金を家財やコンクリートとブロックの新居に投資するのが普通である。1年間の家族との別離を我慢すれば、竹とニッパヤシの家からコンクリートの家へ移り住むことが出来るのである。そして、帰国後数日間続く宴会。

まわりの連中の反応は敏感である。羨望、憧憬。その結果、出稼ぎ者の成金物語に刺激されて、よし、自分も…と出稼ぎに応募して採用待ちの人が現在10数人もいる次第である。なんとなくテレパチオ村全体が成金物語に浮かれた感じで、足が地につかず、稲作のことに注意緩慢なのが心

配の種である。

IV) 種子の更新

当地では5期にわたり連続してIR-36を作付してきた。IR-36は病虫害抵抗性、収量の面からも他品種より優れており、農民に根強い人気を持っている。しかし、長期にわたって栽培され続けてきたので他品種の種子の混入が目立つようになったし、かつ、当地では種子消毒の習慣がないので病気に冒された種子も増えていると思われる。

そこで、1日、村長さんとマニラ市内にあるBPI (Bureau of Plant Industry)の種子販売部を訪ずれ、2年に1年の割合で新しい種子を購入するよう彼に指示した。BPIで原種を買い、村に持ち帰り村長の水田を使って増殖し、次期に村人の古い種子と交換させるわけである。原種10kgからは20カバン取れる。

実際には昨年、乾期直播き用としてIR-40の原種20kgをBPIで購入し、農民の古い種を更新しようとした。が、各農家に原種を配ったため緻密な管理が出来ず、その結果、原種の高い品質を維持することが出来なかった。今後、村長の水田1ヶ所で増殖するようにした。

V) 今後の展望

雨期には現在、施肥量N:60-P:30-K:0でIR-36を使いヘクタール当たり80カバン取れている。これを頻繁な水田の見回り、種子の更新、適期病虫害防除により100カバンにまで上げて欲しいと思う。

乾期稲作はその年の雨期後半の雨量に大きく左右されるが、例年生育後半に用水路に水がこなくなり水不足となるのが常である。よって手間のかからない直播きが広まっている。これからはIR-36にかわって、背丈が高く雑草との競争力の強いIR-40が広まっていくと思われる。

なおJOCVの援助で設置した9台の地下水ポンプは全体で約15ヘクタールの灌漑が可能であるが、ここではIR-36の移植栽培が続けられる。また、水稻2期作後、上述のポンプを使って野菜、特にインゲン、モンゴウの栽培が広まるであろう。

そして、いつも思うのだが、何故農民は堆肥を作らないのか、という古くて新しい問題がある。太平洋戦争中、当地に日本軍が駐留していた頃、兵士の中には農村出身者が沢山いて、トウモロコシやサツマイモを作ったそうである。彼らは井戸の脇に稲ワラを積んで堆肥を作り、畑にたっぷり入れたそうである。実際、当地の40～50代の農民は、日本兵の作った

サツマイモやトウモロコシは丸々と太っていて甘く美味かったと言う。そこで「どうして真似をしないの」と尋ねると、「堆肥作りはしんどいからなあ」という答が返ってくる。進歩も何もあったものではない。この姿勢が一番の障害になっていると思う。

確かに堆肥作りは大変である。雨期稲作の脱穀後、ワラを井戸の近くまで運んで積み上げる。時々水をかけ上下を反転させる。乾期稲作後の野菜栽培の際出来上がった堆肥を水田に運んで鋤き込む。

しかし、日本に比べ家族労働力に恵まれているし、化学肥料は高価であるから、堆肥は作らなければならない。気候的に暑くて大変なのはわかるが、もっと一生懸命働くべきだと思う。

4. 任地での生活・交友状況等

なんといっても一番嬉しいことは、テレパチオ村とパルティエダ村に一人ずつ親友が出来たことである。この2人とは今後もずっと家族ぐるみの付き合いが続いていくことだろう。

一人はゴンザレスさん。テレパチオ村の技術指導者であったのに、プロジェクトの途中でサウジアラビアに行かざるを得なかった彼。彼から出稼ぎの事を打ち明けられた時、あまりに腹が立ってひどい事を言った僕。「技術指導者が抜けたら、この村は一体どうなるんだい。それにリーダーとしての責任はどうなるんだい。」「余所者に俺の気持ちがあわかってたまるか。俺だって行きたかないけど仕様が無いんだい。」それから非難、罵りの応酬、果ては男泣き。土地を地主から買い取りたいそうである。子供4人を大学に進学させる金が欲しいそうである。コンクリートの家を新築したいそうである。そのためには、1年の出稼ぎがどうしても必要なんだそうである。

僕は納得した。彼の立場に置かれたなら、僕も同じ行動をとったであろう。出稼ぎの金で土地を買うことを約束して彼は旅立ったのである。

そして1年が経ち、彼は沢山のお土産を抱えて帰国してきた。しかし、1年では十分な金がたまらなかつたようである。1ヶ月の休暇の後、彼はまたサウジアラビアへ戻っていった。もう1年契約を延ばしたそうである。

彼は大変、JOCVにすまなかつた。月に1度は、必ず彼から便りがある。「俺は農業を忘れたわけじゃない。大きく前進するために今、家族と別離する犠牲が必要なんだ」といつも書いてくる。帰国して自分の土地を持ち、早く農業に復帰出来るよう僕も祈っている。

もう一人は現在福島県農業試験場で研修中のラザロさん。今も思い出すのは日本へ出発する二日前に挙げた結婚式のこと。また、その準備の慌しかったこと。たった二晩のハネムーン。そして出発。それ以来毎日、奥さんが僕の下宿を訪ねてくる。旦那が日本で、色白で切れ長の目をした日本女性と浮気をしていないかどうか心配らしい。

将来は村長さんになるであろうラザロさん。帰国したら村の良き指導者として頑張りたい。

5. 役に立った携行医薬品

訓練中に熱帯病に関する講義と三角巾を使った止血法の実習があったが、僕が一番役に立ったと思うのは、学生時代に1日講習会に参加して習得した外傷に対する処置法であった。

テレパチオ村に半年住んでみて感じたことは、農民の間に非常に怪我の多いことであった。裸足で歩行中ガラスのビンの破片で足を切ったとか、犬にかまれたとか、稲刈中鎌で指を切った等々 あるきっかけで一人の農民の怪我を治療してあげたら、翌日から次々と僕の所に怪我人がやってくるではないか。これが僕の仕事始めて、おかげで村人の顔を隅から隅まで知ることが出来て、その後の本職の仕事の運営がスムーズにいった。

そこで訓練所に示唆したいことは、軽外傷に対する治療法を確実なものにするために、訓練中に携行医薬品を実際に使って講習会を開いて欲しいということである。訓練中の空き時間にも、看護婦隊員の協力を得て隊員自らやるのもいいと思う。

6. さいごに

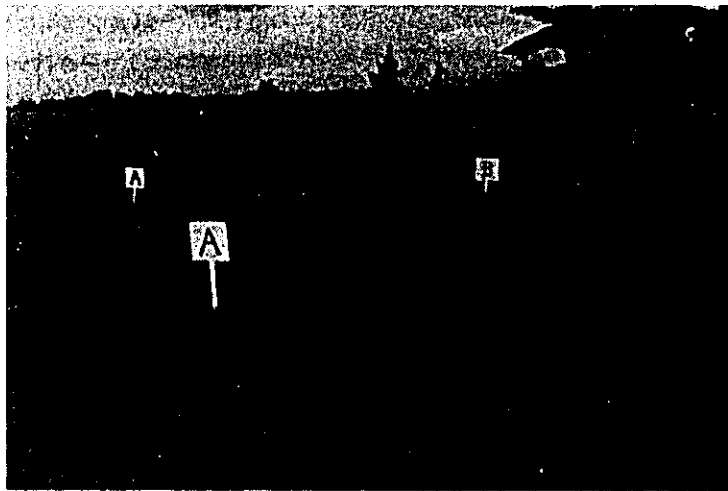
発つ鳥は跡を濁さず、という諺がある。2年と2ヶ月、色々な事があったが、最後ぐらいは颯爽と帰国したいものだ。

現在英文の最終レポート作成やら本文の清書で慌しく毎日を送っているが、せめて心だけは泰然としていたい。専門書や雑誌は郵便小包で日本へ送り出したし、日用品の処分も大体すんだ。あとは四つほどある送別会に備えて、お金と体のコンディションを整えるだけとなった。

マッカーサー元師のように固い決意をもって I shall return と言えないのはちょっと寂しいけれど、また世界の何処かにひょっと顔を出したいと思う。成田空港には胸を張って降り立ちたい。



日本で正月を迎えたラザロさん（右より2人目）
自宅にて 昭和55年元旦



1978年9月
肥料試験ラテン方式による

小瀬川隊員の報告書を読んで

中 川 龍 一

2ケ年余の任期満了を間近に控えての心境を卒直に述べた報告書であって、とくに着任直後の第一印象が、その後2ケ年間にどう変化していったかについての青年らしい感覚がよく表現されている。

また対人交流に苦心し、努力を続けた有様も如実に描かれており、ボランティアとしての活動状況も充分窮うことが出来、フィリピンの農村集落社会を背景として農民やその指導者達との生活を通じての交誼がほほえましいエピソードを加えて、立派な農村生活体験記となっている点はとくに良い。

しかし、青年海外協力隊活動の理念はボランティア精神に培われた技術協力が特徴であらねばならないから、その面からの掘り下げた検討も必要である。

まず、派遣国フィリピン共和国のA C A（農業金融庁）のブラカン州の事務所での業務目的が何であるのか、明確にしておかねばならず、例えばこの報告の内容が殆んど稲作改善であることの事由説明も欲しいところである。

何れにしても、計画目標とそれにアプローチする具体的方策を当初に確立しておいて、最終的にその目標がどこまで実現し得たかという結果の反省がなければ、次の段階への進展もあり得ない。勿論、そのためには中間経過の検討やデータの分析が必要であることは言うまでもないことである。

この報告書の完璧を期するためには、技術指導面での業務内容の記述を更に順序だてて整理し、これを裏付けるデータの分析もより科学的でなければならない。

以下この報告書の記述順に従って、以上に関する幾つかの指摘をすれば概ね次のとおりである。

バルティータ村での活動及び問題点と今後の展望の点で、まず対象地区の稲作についてであるが、一般的に言って高収量改良品種が早急に導入された場合、その品種のその地域での適応性まで充分テストしてある例は少ない。

ここではそのためIR-36やIR-42が取り上げられているが、その他の品種（例えばC4-63(G)）や在来種との比較も必要ではないか。

また、栽培法でまず植え方を検討していることは妥当ではあるが、増収法としては栽植密度の適否の根の活着良否がポイントであって、このことは在来種

と改良種ではかなり違った性質があることに注意すべきである。

勿論、同時に苗代の条件や苗令なども関連するので、単に改良品種に取りかえたといっても、その品種の特性を発揮させるためには他の条件もこれに伴わすことが肝要で、労力的にも資本的にも、改良品種程集約化が必要となり、粗放となれば増収はおろか、収量は不安定なものとなる。

適品種が定まり、これを一般農家に普及する段階になると種籾の増殖を考えねばならないが、この面でも多くの場合不徹底で純粋な改良品種を確実にしかも安価に農家に配ることが大事な仕事となってくる。

そこで、この点に着目して品種更新のため特定の増殖採種圃を設けたのは甚だ適切なアイデアである。単なる栽培技術指導だけでなく、新品種による増産に正しい認識を与える努力を続けるべきである。

次に、田植えについても前述のように特性を活かすような指導が必要であるが、往々にして、共同的田植えや請負による場合、乱雑、不均一になっても、これを正しく指導する相手が定まらず、栽培農家は他人まかせとなっているケースもあり、また刈取作業の場合など、労賃が現物支給のため、多人数が参加して刈取作業の正しい指導が行き届かないこともあり得るので、労力の給源や配分にも留意しなければならない。

その他の技術改善の指導にはなお多くの問題があり、一々コメント出来ないが、たとえ小さな点でも理屈でなく実際にやってみせることと、その際の相手の反応をよく確かめることが肝要である。

地力維持培養のための堆肥づくりまで手を打ったことも大きく評価出来るが、このような間接的でしかも長期を要する技術については目前にその効果を示して理解させることが容易でないから、長期計画として次期隊員にバトンタッチ出来るような態勢を整えておくことも重要なことである。

以上を要約すれば、報告内容には誤りはなく、努力の跡も充分読み取れるが、更にこれらを整理して、現地集落の社会的、自然的条件の下での技術問題として体系的に編成すれば一層完璧な優秀レポートとなるであろう。(青年海外協力隊技術顧問＝農業)

S.N.T.S.でのエレクトロニクス教育

総合報告書	(54年7月~54年9月)
	54年10月14日記
派遣国	フィリピン
職 種	電子機器
氏 名	村 中 常 義
配 属 先	Sogod National Trade School, Sogod, Southern Leyte

村中隊員の略歴

氏 名	村 中 常 義
生年月日	昭和26年12月16日
出身 県	東京都
職 種	電子機器
派遣期間	52年10月~54年10月

現在の任地に移って4ヶ月が過ぎ、そして、それが結局私の任期の終了となつてしまいました。そしてここに、その短いながらも活動した点につき報告書として提出いたします。

従って、前任地についての事項は省略したいと考えます。なお、前任地については前に提出したレポートを参考にしてください。

1. はじめに

1979年5月15日付でPampanga州のTrade Schoolより、Southern Leyte州のTrade Schoolに移りました。1979年6月から始まる1学期の開始に合わせるためでした。着任当時にはエレクトロニクスのコースはまだなく、全てが振り出しからの出発ということになり、それに必要と思われる工具、機材等のリストアップがまず学校側からのリクエストでした。

幸い前任地の時に、JOCVより購入した機器をそのまま移したため、ほとんどの機材(スタートするにあたって必要な物)はあったため、スタートはけっこうすんなりといきました。前のレポートでも述べたように、カウンターパートに恵まれ、また学校の協力姿勢も、他の学校に比べ目をみはるものがあり、現在までこれといった障害もなく過ごすことが出来ました。そして生活そのものを楽しむことが出来て、私の2年間のフィリピン滞在を苦痛に満ちたものでなく、楽しみで満たしてくれたことを、ここにSogodの人々、特に学校関係者に感謝したいと思います。できることならば任期の初めからこの任地にアサインされたならば……と、そのことが残念でしかたありません。いずれにしろ、良い印象をもって日本へ帰ることができ、こんなにうれしいことはありません。

2. 隊員活動

S.N.T.S.(Sogod National Trade School)のエレクトロニクスのコースにおける隊員の活動はおもに、コースの設置及び当面の授業、それに伴う各種の作業という具合に、だいたい仕事があり、私も結局は一部分の事を開始した段階で帰国となり、残念ではありますが、このことは私の交替隊員(54年1次瀬戸逸雄氏)に完成させてもらいたいと考えています。

実際に私のした作業は、おもに生徒を直接教えることによる直接的技術移転(カウンターパートを通してではなく)で、日本的な教育方法と、フィリピンに適すると思われる方法のコンビネーションの教育方法をカウンターパ

ートに示し、これをもって、教育方法（エレクトロニクス）を教えました。そして、論理的に教えることで、ステップ・バイ・ステップの勉強を生徒にさせ、一步一步の前進（のんびりとした）の必要性をなんとかして理解させようと思いました。しかし実際にはなかなかうまくいかず、この点でも今後に期待したいと思います。

授業は午前中に1日3時間あり、主として前半の1時間は講義をし、後半は実習という形で進めました。今年より始めたため生徒は1年生のみ、授業は午前中は1回だけでよく、今年は1年に集中して教えることが出来、それによって作成されるべき資料類は翌年の1年生コースに再利用し、そして来年は2年生を中心として教えるという予定を進めました。その授業中にはカウンターパートも一人の生徒となり、私の授業を熱心に聞いておりました。最初のうちは冗談を言っても全く反応のなかった生徒たちでしたが慣れるに従い、教室内のふん囲気も和らいできて、最後には彼らの方から冗談を言われるようになりました。このようになると彼らがとてもかわいい生徒たちに見え、教えることの喜びみたいなものを得ることが出来て、この先もめんどろを見てやりたいと思いました。また、このような雰囲気を作ることによって私のこの任地での活動は成功したと思います。というのも私の役割は交替隊員が入った際の全ての面におけるギャップをうめるための一種のバッファーであったからで、それが今なんとかすんなりと交替隊員が入れそうな状況から判断すれば、成功したと考えていいと思います。ただ残念なのは、これからおもしろくなってくるという時に去らねばならないことです。しかし、この程度の時点で帰るのも、私のフィリピンについての印象をこわさないことを考えればいい時かもしれません。

3. エレクトロニクス・コースについて

S.N.T.S.におけるエレクトロニクスは、始まったばかりのためカリキュラム、工具、機材etc.がなく、それからのスタートからしなければなりません。幸い機材は私の前任地時に購入したものがあつたため、その他必要品を学校より購入してもらいました。残るは金で購入できないカリキュラムですが、これらは今までの資料をもとに作成中であり、そのうち交替隊員が完成してくれるものと思っています。現在2年制のテクニカルコースしか学校にはないため、当面1年、2年のカリキュラムの作成ですむのですが、来春にでもS.A.T. (School of Arts and Trades) に昇格するといううわさがあり、こう

なると4年制のコースになるため、3、4年用のカリキュラムまで作る必要がでてくることとなります。

教材、教科書、練習問題、実験書etc.と他にも多くの作業が残っているため、これらの作成をも含めていそがしい作業となることでしょう。それらも一応手はつけたのですが、どうしても未完のまま交替隊員の力にたよらなければなりません。

教室は、アカデミックの1室をエレクトロニクスにあててもらい、机も一般の机で、特にこの国でいう作業机ではなく、日本での教室と同様の形をとっています。そして各机には220Vの配線をしてもらい、他の教室とは違った様子になり、いわゆるShopというこの国の実習室とは趣きの異なった教室となっています。他にエレクトリシティーのコースがありますが、これはいわゆるShopの建物にあり、教室というより作業場といった方があつていと思います。またこれがフィリピンにおける電気、電子の認識です。

4. カウンターパート

前回のレポートで紹介したように女性です。最初のうちは彼女も不安があつたらしく、なかなかうちとけなかつたのが1ヶ月、2ヶ月たつうちにうちとけ、私も彼女には私の本心の一部(フィリピンの現状)を示し、エレクトロニクスのあやまった考え方を少しなりとも変更できたと考えます。

彼女は勉強心もあり、私の授業も熱心に聞き、自ら勉強しており、他の学校と比べるとやはり違うなと感じました。これも女性であるためなのかと時々思います。いずれにしても、カウンターパートに対する不安は全くなく交替隊員ともうまくやっていくことを確信しています。できるならば知識があつた時点で日本へ送れるものならば送ってもらいたいと願っています。

5. 学校の協力態勢

私になんの問題もなく任地で過ごせたのも学校の協力があつたからで、活動上何か支障をきたした時は校長に相談し、機材等についてもほとんどそろえることができ、申し分のない協力状態だつたと思います。以下、学校側で購入してもらつた機材リストをのせておきます。

1. Soldering iron	20
2. Metal saw	5
3. Hand drill	6

4. Cutter	20
5. Center punch	3
6. Driver set	20
7. Soldering lead	8
8. Hammer	3
9. Twizers	20
10. Drill bit	12
11. AF Generator	2
12. 15W Amplifier	20

その他部品、バッテリー等

私が必要と言いきリクエストしたものは全てそろえてもらい、このことからもいかに学校がやる気があるかわかると思います。今後S.A.T.に変更になった時の4年制コース移行の際のTVコース新設の時には、JOVCVからも機材の援助がされることを、ここをお願いしておきたいと思います。その意味でもフィリピンの隊員の入っているプロジェクトのうちで一番期待のもてるものだと思います。他のプロジェクトの状況を聞いて比べてみたいと思っています。

6. エレクトロニクスと数学

エレクトロニクスと数学は切っても切れない関係にあります。しかるにこの国の関係はどうなっているか？ 全く関係ないといったら語弊がありますが、そのようにうけとられています。私の来比当時は事情もよく知らず、また、先登隊員からも、数学の状況をあまりよくきかなかったので、数学はどうしても必要だ、数学なくしてエレクトロニクスはありえないと思いました。それが、1年以上も続きました。

しかしある時、数学はそんなにいらんのではないか、ということにふと気がつき、そして教えていくうちに、それが確信に変わってきました。数学はいらんといっても最低限度のことはどうしても必要です。というのもエレクトロニクスを理解するには数学ではなく、考え方であるからで、それ以上のエレクトロニクスにはすなわち数学が必要です。ですから、具体的な個々の部品の組み立てが一つのラジオ、TVを動かすのであり、ラジオ自身がラジオを動かすのではない(つまり、ラジオという個体は一つ一つのパーツの集合であって、それら一つ一つの動きがラジオという働きになる)。だか

ら、一つ一つの動き、性質を教えてやり、その組み合わせの動作を教えてやればよいのであって、そこには数学はあまり必要ではないということがわかったのです。それ以来私はあまり数学を重要視しなくなり、実際教えてみると、数学…算数の出来も悪い、がしかしそれがなくともエレクトロニクスは教えることが出来た、そう思っています。

一部の隊員には、数学のやり直しを主張する人もいるが、私はその必要は全くないと思っています。まして高等数学である微分積分、複素数などんでもない、私だってお手あげです。我々の学生時代を思いうかべるとよくわかるはずで。複素数、微積は高校時代学びましたが、何んの役に立つかわからずに勉強しなければなりません。それをフィリピンにあてはめて考えれば火を見るよりも明らかです。高等数学がどうしてラジオに結びつくのかフィリピン人だって不思議に思うに違いないのです。

たしかにフィリピン人の数学力…算数力は低い。たとえば $1 \div 100$ を $100 \sqrt{1}$ として計算します。そして0.01と答えを出しますが、時たま0.001とか、0.0001と答える生徒もいます。しかしこれは非難出来ないでしょう。現在の教育システムでは算数力の向上は望めません。毎日1時間の数学の授業でも、週5時間の内容といえ、練習問題を山のようになす日本と違って数問。これでは、算数力のつきようがないわけです。技術協力とはいってもしよせんうわべだけしか改まらないのであり、本質的には何にもならないのではないか、やるとしたらこういう基礎の基礎からの協力でなくては、数十年先にわたる国づくりの協力にならないのではないかと最近思います。

数億、数十億にもぼるお金の協力も一つの協力でしょう。機器の供与も一つの協力でしょう。しかし、この国で必要としているのは人材であり、知識なのだから、それらの素地を作る教育システムそのものをもっと充実したほうが先の先を見るぶんにはベターだと思います。それはじみな協力になるでしょう。あまり受けは良くないでしょう。しかし真に国に協力するならば、お金や機材で協力するよりも、よほどこの国のためになるのではないかと思います。表面はとりつくりつても中身はからっぽというより、ポロはきてても……のほうがよほどましだと思います。

この点に比国、日本、その他、先進国が気がついているのかどうか疑問です。もし、気がついていてそれでも技術協力をこのままの形で進めていくなれば、なんの改善も望めないのではないかと思います。これは、なにも数学の点だけから気がついたことではなく、工業化するに必要な自然科学の知識

にもあてはめられます。

7. その他

先日 Sogod で S.N.T.S., Emergency hospital, Municipal worker の三者スポーツ大会がありました。ソフトボール、バレーボール、バスケットボール、バドミントン、卓球その他。そのうち私もソフトボールとバレーボールに出場させられ、皆と一緒にってはしゃぎました。特にソフトボールでは一発打ったため、次の打席ではものすごい歓声があがり、S.N.T.S.に日本人ありと大いに宣伝できたと思います。おかしいことに気がついたのは審判です。バスケットボールは問題ありませんでしたが、ことバレーボールやソフトボールになると支離滅裂。フォースアウト(ソフト)はダメで、タッチしなければアウトでないというありさま。これをいくら抗議してもうけつけられず、しまいにはあきらめてしまいました。バレーボールはバレーボールで、インターナショナルとことわっておきながら、3セットマッチで1対1のラストのセットは、なんと16ポイントとらないといけないという、とんでもないことを言い出すしまつ(15ポイントで終り)。それを信じてうたがわず、これをいくら注意してもダメ。これらはスポーツに見たフィリピン人の性格であり、それをよくあらわしています。権威そしてガンコさ。フィリピン人の悪い点をまともに見てしまったスポーツ大会でした。それでも大いに楽しめ、そのあとのパーティではダンスのしどおしの楽しいスポーツ大会でした。

6月に着任し、現在まで一度も日本人の悪口を聞きません。レイテ島といったら、激戦地で有名であるため、私も当初はそれを予想して行きましたが、全くそんな話は聞かず、ちょっと拍子ぬけの感じでした。前任地のバンバンガでは何かあるたびに日本人の事を聞いていやなおもいをしたのですが、Sogodでは一度もなく、これも人の違いのためかと思いました。ビサヤ地区とルソン地区では、やはり人が違う、というのが僕の観察した点です。冗談一つとっても笑える冗談はビサヤ地区、苦笑いがセントラルルソン地区と異なっています。レイテ島南部のソゴット(Sogod)ではほとんど戦争のキズ跡は消えているようです。しかし、時々、山をながめると、ちょっと形がおかしいなと思うことがあり、それが現在残っているキズ跡と言えるかもしれません。それでも、こんな小さな町にもHonda, Kawasaki, Suzuki, Yamaha, Toyota, そしてFuji colorが進出し、回りの品は日本製ばかり。若い

人々は、日本のことを昔の日本と違ったものとして見、ほとんど悪く思っている人はいないのが現状です。

Sogodの治安は良く、別にそうぞうしくはないのですが、先日40Kmほど離れた町(港町)で船のCaptainが、Armyの兵士にM-16で2~3発撃たれたというのがありました。それ以外は事件らしい事件もなく、ごく平穏な町です。しかし物価上昇の波はこの小さな町までおしよせ、ガソリン1ℓ3.50ペソもする始末です。またローカルエアプレーン(セブ—レイテ)はいつも欠航しており、何度かめいわくをこうむったものです。そのたびにエンジントラブルでした。しかし一たんこの運賃が上ると、欠航なしで順調に飛んでいます。「なるほどね」と交替隊員とうなづいたものでした。

またセブ—マニラ間の航空運賃も、1979年4月、8月と2回にわたって値上がりし、隊員の任地間がまた一段と速くなり、生活しにくくなったと皆が言っております。私にしてみれば、いい時に帰国するなと思っています。

いずれにしろ、2年間の長きにわたってめんどうを見てくれた調整員の方々にはお礼を申し上げたいと思います。どうも長い間ありがとうございました。

日本に帰って考えること

村 中 常 義

帰国してすでに3ヶ月以上がたち、だんだん日本の生活にも慣れ始めた。帰国して成田を出た時にはあまり日本という印象はなく、まだフィリピンのハイウェイを走っている気持ちだった。しかし東京に近づくにつれネオンの灯が見え、その日本語が目に入るとやっと日本なんだという気がしたものだ。と同時に恐ろしくもなった。シティターミナルを出て弟とタクシーにのり家へむかったが、その気持ちは消えず、やはりカルチャーショックの存在を認めざるを得なかった。そんなスタートであったが、やはり人間、順応性にすぐれているのか今では元のおおごく普通の一人の日本人としてくらしている。帰国してまず思ったことはやはり日本と他の国(私は比国しか知らないが)の違いであった。日本においては絶対わからないことが、いったん外国でくらすと、細かい点についても違いがあることがわかった。そして帰国して改めて実感した。「井のなかのかわず大海を知らず」とはよくいったものだと、痛感した。それと同時に日本という国、東京という都市が非常にこわくなった。暴力うんぬんではない。この日本という国はおおげさになるが、ガラスのお城である。石油のない日本が考えられるだろうか？否！これだけ繁栄を誇っている日本だが、それも虚構であり、いつくずれるかわからない薄氷の上を歩いているようなものである。その上東京という都市に1千万人以上が住みそれらの人々が毎日毎日摂っている食物はどのくらいになるのか？そしてそれがいったんストップしたらどうなるのか？そんなことを想像しただけでも、ゾーとし、逃げ出したくなる。そのこわさを知る人はほとんどいないのではないだろうか？またそのこわさを人々に説明しても次元が違うかのように、理解されない。いったい日本はどうなっているのか？と思うこともあり、最近口を閉じている。その点フィリピンとくに私の居た町Sogodでの生活を思い浮かべると、フィリピンのほうがいかに生活が根についているかがわかる。今、石油がなくなっても死ぬわけでもなくのんびりしたものだ。オイルショックもなんのその、日本みたいに石油依存度が高くないらしく、今だに朝になるとヤシの木の間から各家の煙が上がってまるでモヤがかかっているようになる。そんな時代もあった日本だが、もうもどることはできなくなっている。日本の一般家庭の状況を見

たら、フィリピンの人はそれこそうらやましがらるだろう。冷蔵庫、洗たく機、電話、カラーTV、自動車。日本ではそれが当たり前であっても開発途上国の人々にとっては雲の上のことであり夢のようなことなのだろう。そんなことに日本人は気がついていない。上を見てばかりいるような気がする。上を見ればきりが無いが、下を見ればもっときりが無い。物価が上がった。賃金が低いとさわいではいるが、その気になればなんとかやっけていくこともできるはずだ。それをしないで容易な方向へはしっているような気がする。

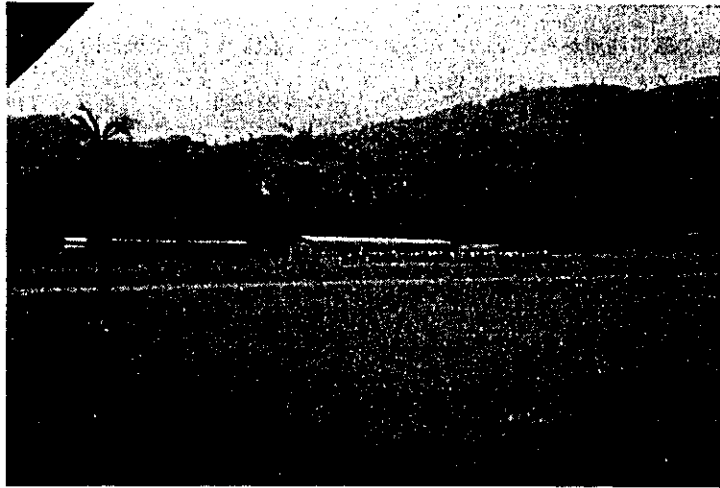
またフィリピンでは自殺がほとんどないと聞いた。実際土地の人に聞いても知らないと言うし、うわさも聞いたことがない。その点日本では自殺が多い。特に若年者の自殺が多く、それも小学生も含んでいるというので一時フィリピンの新聞にも紹介され、その事を質問されたことがあった。ハイスクールの2年生のクラス(中2クラス)に招待された時のことであり、日本についての質問の一つだった。この時私は説明に困ってしまった。自殺を考えたことのない人に説明するのは容易ではない。一つの例として人生における壁をたとえにとつて、説明した。しかし完全にわかったわけではなく、なるほどというようだった。今の世の中あまりにも単純に自殺がはやっている。やはり人生の壁にぶつかつてそれを乗り越えることが出来ないから逃避するのか?僕にはわからない。しかし一つだけわかったことがある。それはあまりにも日本の世が平和であり生活が豊かになった。その分精神面で空白となった部分があるのではないかということである。

皆、敷かれたレールの上を歩いている。そしてそれを歩いていることをいやに思っている。なんとか別の道をさがしたいと思っている。しかしそれが実際にはできない。レールを踏みはずすことをしないで生きているような気がする。飲み屋へいくとそれがわかる。だから最近いくのがあまり好きでない。

若い時の2年間、ちょっとより道してしまった2年間だがそれによって自分の視野が広がり、物を別の観点から見る事が出来るようになった。日本での2年間とは比べることのできない貴重な2年だったと思う。帰国してみてこの2年間に成長したことを時々感じる、そんな毎日です。この貴重な体験をこれからの生活に生かせればと考えています。



バスケットボールの試合



キャンパス

村中隊員の報告書を読んで

向 井 政 昭

1978年3月、私は青年海外協力隊事務局の要請でフィリピンとマレーシア両国の職業訓練校の現況調査を行なった。

このときフィリピン、バンバンガ州のドン・ホノリオ工芸学校でお目にかかったのが村中隊員である。

当時彼はこの学校に派遣されて間もないらしく、設備機材の不足する中で今後の協力活動のあり方を懸命に模索していた。

その後村中隊員はドン・ホノリオ工芸学校から、南レイテのソゴット工芸学校に移ったとのことであるが、私にとっては上記のようないきさつもあって、このレポートを大変なつかしく拝見した。

以下このレポートを読んで気付いた点を2、3述べてみることにしたい。

1. ゼロからのスタートについて

協力隊事務局から定期的を送られてくる派遣隊員（電子機器関係）のレポートによると、隊員が学校に着任し、そこから新たにエレクトロニクスコースの設置に伴う活動を要請されるケースが多い。

村中隊員の場合もこの例にもれず、いわゆる新コースの生みの苦勞がうかがわれる。

しかし、その反面、このような環境であればこそ、そこに自分自身の夢を実現するチャンスがあると考えるのは的はずれだろうか？

このレポートを読むかぎり、村中隊員はS.N.T.S.に彼自身の夢を実現し得たのではないかと思う。

ただ問題は苦勞して彼が築いたこの夢を今後どのように発展させて行くかである。

そういった意味で、後続隊員との引き継ぎの問題は重要であり、関係者のよき御指導を期待したい。

2. 学校における指導方法について

フィリピンの職業訓練校における協力隊員の活動の中にはカウンターパートの指導を通じて生徒を間接的に指導するケースが多いと聞いている。

しかしながら隊員とカウンターパートの年齢差が大きいため相手がこれを

受けつけず、隊員の知識や技能が生徒まで伝わらないという話もよく聞く。

このような環境下においては隊員による生徒への直接指導は効果的かも知れない。

ただこのような指導方法をとるかぎり、現地の教員のレベルアップは望めず、その学校にはいつまでも協力隊員が必要ということになってしまうのではなかろうか。

この点村中隊員は生徒を直接教えながら、日本的な教育方法とフィリピンに適すると思われる教育方法を組み合わせたものをカウンターパートに示し、教育方法の教育を行なったとのことであるが、この場合は当を得ていると思う。

そして、このような指導方法をとった結果、カウンターパートも次第にうちとけ、教室内の雰囲気も和らいできて、生徒たちから冗談を言われるまでになったとのことであるが、この点彼の努力を高く評価したい。

3. 教科書について

教科書の問題は多くの協力隊員にとって悩みのタネであるが、村中隊員もこれで大変苦労した模様である。

彼は新コースの設置に伴い、教科書類の作成に積極的に取り組んだ模様であるが、時間的に後続隊員にバトンタッチせざるを得ないらしい。ついでにはその引き継ぎを確実にしない後続隊員の協力によって立派な教科書をぜひ完成させてほしいと思う。

なお、この教科書の問題は村中隊員のみならず協力隊員全員の共通な問題でもあろうから、この際日本の適当な専門書を翻訳使用させてはどうか？

これによって隊員の指導方法なり内容が統一され、教育効果も上るだろうし、後続隊員との引き継ぎも明確になるのではないかと考えるがどうであろうか。

4. おわりに

このレポートの中で村中隊員は“エレクトロニクスに数学はさほど必要ないのではないか。エレクトロニクスを理解するには数学ではなく考え方だ”と述べている。

たしかにこれらの職業訓練校においてテレビやラジオの修理を教えるだけであればその通りであろう。

ただ村中隊員のいうように、基礎の基礎からの協力でなくては、数十年先にわたる国づくりの協力にならないとするならば、上記のような技術協力と並行して基礎的な協力も当然必要ではないかと考える。

ともあれ、2年前にお目にかかった村中隊員が、期間が短かったとはいえ、

よき学校関係者にめぐり合い、楽しかった思い出を胸に協力隊活動を終えられたことは大変喜ばしく、今後のご活躍を心からお祈りしたい。（青年海外協力隊技術専門委員＝電子機器）

あ と が き

青年海外協力隊員の報告書集を発刊するに際し、数多い報告書を、どう分類し、いかに活用するか、いろいろ意見がありましたが、隊員の活動を広く紹介する観点から、今回は国別編とし、昭和54年度、55年度の2カ年で全派遣国編を完了させる予定とし、その後、順次、違った角度で報告書集の作成を継続する方針で臨みました。

国ごとに収録した報告書の数も、諸般の都合で数篇に限定せざるを得ませんでしたし、職種の配分などについても、それぞれの国における協力隊の特徴をカバーしているかなど、不十分な点もあろうかと思いますが、とりあえず発刊に踏み切りました。

ご活用下さる皆様がたのご意見、ご提言をいただきつつ、今後一層の充実をはかりたいと思います。

末筆ながら、この報告書集のために、ご多忙中にもかかわらず、積極的にご協力いただき、報告書に対するコメントをご執筆下さった技術専門委員の方がた、ならびに報告書の収録を快諾され、「追記」の原稿を寄せられた帰国隊員の皆様に厚くお礼申し上げます。

なお、本報告書集のご活用にあたり、他への転載等を企画される場合は、青年海外協力隊事務局（啓発課）に必ずご相談下さるようお願い申し上げます。

昭和55年3月

啓発課長 高橋成雄

海外協力の現場から——青年海外協力隊員の記録〈フィリピン編〉

昭和55年3月発行

編者 国際協力事業団青年海外協力隊事務局

発行所 国際協力事業団青年海外協力隊事務局

〒150 東京都渋谷区広尾4-2-24

電話 (03)400-7261(代)

印刷所 邦美印刷株式会社

〔非売品〕

